

袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ

高道遺跡 3 ～ 7 次試掘確認調査

古新田遺跡 1 0 ～ 1 4 次試掘確認調査

馬伏塚城跡 1 1 ・ 1 4 次試掘確認調査

松山遺跡 2 次試掘確認調査

浅羽大圀堤試掘確認調査

大門遺跡試掘確認調査

山畑遺跡試掘確認調査

萱間地点試掘確認調査

2 0 0 9

袋 井 市 教 育 委 員 会

袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ

高道遺跡 3 ～ 7 次試掘確認調査

古新田遺跡 1 0 ～ 1 4 次試掘確認調査

馬伏塚城跡 1 1 ・ 1 4 次試掘確認調査

松山遺跡 2 次試掘確認調査

浅羽大囲堤試掘確認調査

大門遺跡試掘確認調査

山畑遺跡試掘確認調査

萱間地点試掘確認調査

2 0 0 9

袋 井 市 教 育 委 員 会

例 言

- 1 本書は、2001年度から継続している浅羽町内遺跡発掘調査報告書作成事業を2005年4月1日の袋井市・浅羽町との合併後も袋井市単独事業として継続したもので、昨年度に引き続き『袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』として発刊するものである。
- 2 本書は2004年度に行われた、旧浅羽町浅羽に所在する高道遺跡2次試掘確認調査、旧浅羽町諸井に所在する山畑遺跡試掘確認調査、2005年度に行われた高道遺跡3・4次試掘確認調査、萱間地点試掘確認調査、浅羽に所在する古新田遺跡10次試掘確認調査、2006年度に行われた古新田遺跡11・12次試掘確認調査、高道遺跡5次試掘確認調査、2007年度に行われた高尾に所在する大門遺跡試掘確認調査、高道遺跡6・7次試掘確認調査、松山に所在する松山遺跡2次試掘確認調査・浅羽大囲堤試掘確認調査、浅名に所在する馬伏塚城跡11次試掘確認調査、古新田遺跡13次試掘確認調査、2008年度に行われた古新田遺跡14次試掘確認調査、馬伏塚城跡14次試掘確認調査の報告書で、現地調査は2004年度から2008年度の国庫補助事業「浅羽町内遺跡発掘調査等事業」「袋井市内遺跡発掘調査等事業」として実施した。
- 3 高道遺跡3次試掘確認調査は店舗造成に先立つ調査、山畑遺跡試掘確認調査は墓地造成に先立つ調査、高道遺跡4・5次試掘確認調査は宅地造成に先立つ調査、萱間地点試掘確認調査・古新田遺跡10次試掘確認調査は開発計画に先立つ調査、古新田遺跡11・12次試掘確認調査、松山遺跡2次試掘確認調査、浅羽大囲堤試掘確認調査は遺跡範囲確認のための調査、高道遺跡6・7次試掘確認調査は集合住宅建設に先立つ調査、大門遺跡試掘確認調査、古新田遺跡14次試掘確認調査は個人住宅建設に先立つ調査、馬伏塚城跡11・14次試掘確認調査、古新田遺跡13次試掘確認調査は遺跡の詳細把握の調査としてそれぞれ実施した。
- 4 2008年度の報告書作成業務の体制は次のとおりである。

主体者	袋井市教育委員会教育長	戸塚雅之
担当者	袋井市教育委員会生涯学習課文化財係長	山本義孝
事務局	袋井市教育委員会教育部長	鈴木英二
	袋井市教育委員会主席参事兼生涯学習課長	小粥保夫
	主任主査 松井一明	主査 水野雅彦
	主査 白澤 崇	臨時職員 鈴木寿美子
	袋井市立浅羽郷土資料館臨時職員	鈴木仁美
- 5 本書の執筆・編集は山本が行い、遺構図の編集・遺物の実測・トレースは鈴木仁美が、高道遺跡6・7次試掘確認調査、大門遺跡試掘確認調査の執筆は調査担当者である水野雅彦がそれぞれ分担して行った。
- 6 本書で用いた水準は海拔、方位は磁北である。
- 7 本書で用いた土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帳』にもとづいた。
- 8 調査によって出土した遺物、調査に関わる諸記録は袋井市教育委員会が保管している。

本文目次

例言

第1章 環境	1
第2章 調査報告	4
1節 高道遺跡	4
2節 古新田遺跡	11
3節 馬伏塚城跡	18
4節 松山遺跡・浅羽大囲堤	26
5節 大門遺跡	30
6節 山畑遺跡・萱間地点	34
第3章 総括	36

写真図版目次

図版1	1. 高道遺跡3次 1トレンチ全景	2. 高道遺跡3次 出土遺物
	3. 高道遺跡3次 出土遺物	4. 高道遺跡3次 出土遺物
	5. 高道遺跡3次 出土遺物	6. 高道遺跡3次 出土遺物
	7. 高道遺跡4次 1トレンチ	8. 高道遺跡4次 3トレンチ溝
	9. 高道遺跡5次 3トレンチ	
図版2	1. 高道遺跡6次調査6-1 t r (西から)	2. 高道遺跡6次調査6-2 t r (西から)
	3. 高道遺跡6次調査6-3 t r (西から)	4. 高道遺跡6次調査6-4 t r (西から)
	5. 高道遺跡6次調査6-5 t r (西から)	6. 高道遺跡6次調査風景(東から)
	7. 高道遺跡7次調査7-1 t r (東から)	8. 高道遺跡7次調査7-2 t r (東から)
図版3	1. 高道遺跡7次調査7-3 t r (東から)	2. 高道遺跡7次調査7-4 t r (東から)
	3. 高道遺跡7次調査7-5 t r (東から)	4. 高道遺跡7次調査7-6 t r (東から)
	5. 高道遺跡7次調査7-7 t r (東から)	6. 高道遺跡7次調査出土遺物
	7. 古新田遺跡10次調査西トレンチ	8. 古新田遺跡10次調査東トレンチ
図版4	1. 古新田遺跡11次調査掘立柱建物1 (北から)	
	2. 古新田遺跡12次調査掘立柱建物1 (西から)	
	3. 古新田遺跡11次調査掘立柱建物2 (南から)	
	4. 古新田遺跡11次調査掘立柱建物2 (柱部分)	
	5. 古新田遺跡13次調査出土遺物	
図版5	1. 古新田遺跡13次調査全景(北から)	2. 古新田遺跡13次調査全景(南から)
	3. 古新田遺跡14次調査風景	4. 古新田遺跡13次調査地周辺
図版6	1. 古新田遺跡13次調査全景	2. 馬伏塚城跡11次調査 調査区全景(北から)
	3. 馬伏塚城跡11次調査 溝1 (西から)	4. 馬伏塚城跡11次調査 土壇状遺構2 (西から)
	5. 馬伏塚城跡11次調査 集石3 (北から)	
図版7	1. 馬伏塚城跡11次調査 柱穴2 半截状況	2. 馬伏塚城跡11次調査 土坑内サブトレンチ
	3. 馬伏塚城跡11次調査 出土遺物1	4. 馬伏塚城跡11次調査 出土遺物2
	5. 馬伏塚城跡11次調査 出土遺物4	6. 馬伏塚城跡11次調査 出土遺物
	7. 馬伏塚城跡14次調査 中央トレンチ(南から)	

- 図版 8 1. 馬伏塚城跡14次調査 中央区柱穴 2 2. 馬伏塚城跡14次調査 中央区土坑 1
3. 馬伏塚城跡14次調査 東区全景 (東から) 4. 馬伏塚城跡14次調査 出土遺物
5. 松山遺跡 2 次調査 1 トレンチ (南から)
- 図版 9 1. 松山遺跡 2 次調査 2 トレンチ柱穴 2. 松山遺跡 2 次調査 1 トレンチ出土遺物
3. 松山遺跡 2 次調査 2 トレンチ (北から) 4. 大門遺跡試掘調査 1 t r (西から)
5. 大門遺跡試掘調査 2 t r (北から)
- 図版 10 1. 大門遺跡試掘調査 3 t r (東から) 2. 大門遺跡試掘調査 2 t r 遺物出土状況
3. 大門遺跡試掘調査地近景 (北から) 4. 大門遺跡試掘調査地近景 (北から)
5. 大門遺跡試掘調査出土遺物 6. 大門遺跡試掘調査風景
7. 浅羽大囲堤 道路截ち割り状況 8. 浅羽大囲堤残存部 (南から)

挿 図 目 次

図 1	袋井市の位置	1
図 2	本報告書掲載の遺跡	3
図 3	高道遺跡 3 ～ 7 次調査地点	5
図 4	高道遺跡 3 次調査 トレンチ位置図	5
図 5	高道遺跡 3 次調査 出土遺物実測図	5
図 6	高道遺跡 4 ・ 5 次調査 トレンチ位置図	7
図 7	高道遺跡 4 ・ 5 次調査 土層図	7
図 8	6 - 3 t r 遺物包含層遺物実測図	8
図 9	高道遺跡周辺旧地形 (昭和42年)	8
図 10	高道遺跡 6 ・ 7 次調査区 トレンチ配置図	9
図 11	高道遺跡 6 ・ 7 次調査区 トレンチ断面図	10
図 12	古新田遺跡10～14次調査地点	11
図 13	古新田遺跡10次調査 トレンチ位置図	11
図 14	古新田遺跡11・12次調査全体図	13
図 15	古新田遺跡11次調査 掘立柱建物 1 ・ 2 柱穴断面図	14
図 16	古新田遺跡13次調査全体図及び 掘立柱建物 1 ・ 2 柱穴復元案	16
図 17	古新田遺跡13次調査 出土遺物	17
図 18	馬伏塚城跡11・14次調査地点	18
図 19	馬伏塚城跡11次調査全体図	19
図 20	馬伏塚城跡11次調査 遺構断面図・集石 3 実測図	21
図 21	馬伏塚城跡11次調査 出土遺物実測図	22
図 22	馬伏塚城跡14次調査 中央区全体図・出土遺物実測図	23
図 23	馬伏塚城跡14次調査 中央区遺構断面図	24
図 24	馬伏塚城跡14次調査 東区全体図	25
図 25	松山遺跡 2 次調査・浅羽大囲堤調査地点	26
図 26	松山遺跡 2 次調査 トレンチ実測図	27
図 27	松山遺跡 2 次調査 出土土器	28

図28	浅羽大囲堤平面図・土層断面図	29
図29	大門遺跡試掘確認調査位置図	30
図30	大門遺跡試掘確認調査 トレンチ配置図	32
図31	大門遺跡試掘確認調査遺構図	33
図32	大門遺跡周辺の旧地形復元・主要遺跡、古墳等分布図	34
図33	山畑遺跡・萱間地点調査位置とトレンチ配置図	35
図34	馬伏塚城跡主要遺構図	36
図35	古新田遺跡主要遺構図	37

第1章 環 境

地理的環境

静岡県西部(旧遠江国)に属す袋井市は、南は県内で最も広い遠州海岸平野の東端から、北は磐田原台地の北端までを占め、面積は108.56km²に及んでいる。

南北に細長い市域の北東から西側にかけては斜めに周智郡森町大日山(標高881m)に端を発する太田川が南流し、中央部には掛川市八高山(標高832m)に端を発し西流してきた原野谷川が大きく流れを南に向け、太田川と合流し太平洋へ注いでいる。

市域の中央部には旧東海道の宿場町として発展した袋井地区、南側にはJR袋井駅を中心に栄えた高尾地区が位置している。太田川・原野谷川の両岸に広がる沖積地は北部・中央部の穀倉地帯となり、南部の東側には小笠山丘陵が位置している。海岸に面し、市域の南側一帯を占める浅羽地区は通称浅羽低地と呼ばれる低湿地が8割近くを占め、田園地帯が広がる景観を呈している。

本書に収録した高尾地区の大門遺跡は小笠山丘陵が西へ延びた尾根筋が原野谷川と接する標高18～20mの段丘上に立地する他は、浅羽低地に臨んだ小笠山丘陵末端の段丘上を中心に展開する遺跡群である。

歴史的環境

ここでは、本書に収録した遺跡に直接関わる歴史的環境を整理する。このうち大門遺跡に関しては、2章5節の中で個別に項目を設けて述べることとする。

高道遺跡は字浅羽の北端をなす段丘末端から原野谷川の支流が形成した低地の自然堤防にかけての範囲に広がっている。これまでに広範囲に及ぶ発掘調査が行われたことはないが、歴史的環境から勘案し5世紀後半を中心とする古墳時代中期、浅羽荘が立荘される平安後期から鎌倉時代にかけての時期にピークを迎える遺跡と認識している。

古墳時代中期には豪族居館(居宅)である古新田遺跡を最奥に構え、その前面に展開し、低地の舟運を背景とした関連集落が存在したものと想定している。

平安後期から鎌倉時代にかけては殿下渡領で勸学院領浅羽荘の北端をなす柴郷に相当し、そこは現

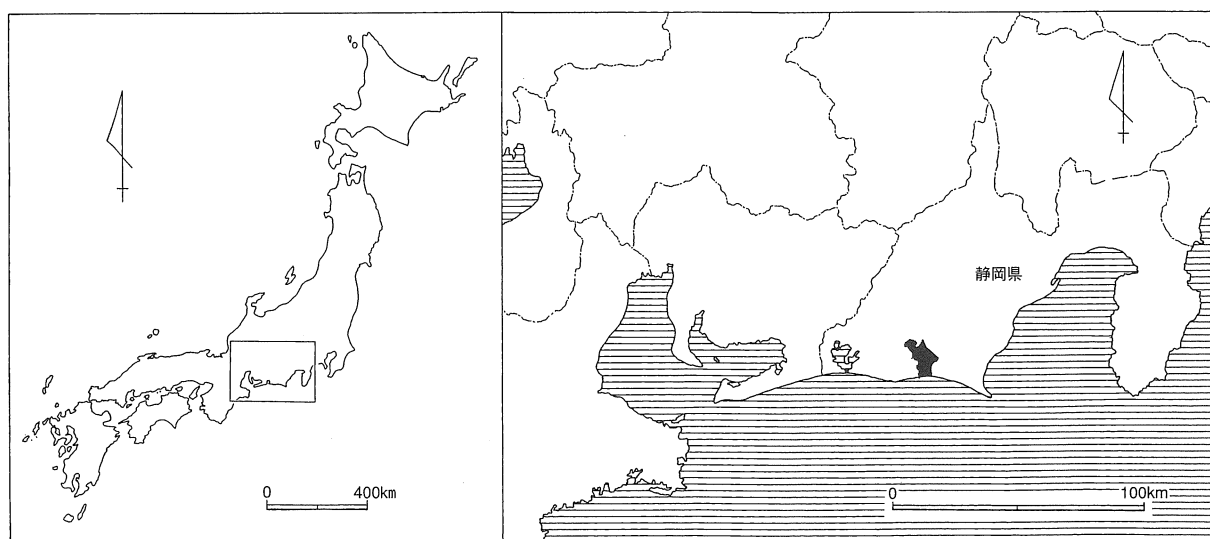


図1 袋井市の位置

地代官を務めた在庁官人とされる浅羽氏の本貫地であり、その居館の浅羽館が2000年度の試掘調査によって確認された。遺跡の範囲内は莊園鎮守社の一つ柴春日社と、室町時代に勧請されたと推定される浅羽三社八幡宮の一つ柴八幡宮が存在する重要な土地であった。

古新田遺跡は小笠山段丘上に営まれた5世紀後半の豪族居館(居宅)で、その敷地面積は約1万㎡に及ぶ。居館域の南側では谷を埋めて広場を造成し、その周りには大型建物群が6棟並ぶ。そこには正殿の中心をなす四面庇建物が2棟存在することから「政庁域」と推定され、北側には広場を囲ってロの字状に配置された倉庫群・南側に庇を持つ管理棟が規則正しく配置される空間、更に西側では祭祀に伴う複数の土坑が見つかり、滑石製玉類が多量に出土する「祭祀域」が確認された。

本報告書で報告する11～13次調査地は、この居館域からは小さく入り込んだ谷を隔てた尾根筋の入口に相当し、これまでは居館に付随する同時期の一般集落と推定していた場所である。

馬伏塚城は掛川市土方(旧大東町)の高天神城とともに遠州を代表する戦国時代の城郭で、今川氏の時代には南遠地域の要として、守将に重臣の小笠原氏が置かれた。この頃は、麓の居館と背後に位置する丘陵部の詰城(呑吉山)からなる構造であったと考えられる。

永禄12年(1569)に徳川家康が遠江に侵攻した後、小笠原氏は徳川方に下るが、駿河に侵攻した武田信玄との間で遠江の覇権をめぐる抗争が繰り返された。天正2年(1574)6月には遠州の要となる高天神城攻略のため、馬伏塚城は武田勝頼の攻撃により落城するが即刻取り返し、家康は大須賀康高に命じて高天神城奪還の前線基地として大改造を加えさせた。

城が位置する岡山地区は、小笠山段丘の末端から南方向に延びる支尾根の最末端に相当する。現在は周りの低地は一面の水田となっているが、当時は潟湖が深く入り込んだ景観であり、これを活かした大規模な土塁を廻らす本格的な水城に改造したと考えられ、船着場と荷物の集積を考えさせる水域を埋め立てて築かれた曲輪の存在と、「シオカラ」等の小字が残されている。

浅羽大囲堤は慶長9年(1604)に始まる遠州総検地と連動した、遠州海岸低地の河川改修及び新田開発事業のなかで行われた原野谷川・太田川合流工事に端を発する堤防で、浅羽低地の外周を総延長12.7kmにわたり築堤したものである。

この堤の完成により、内部には30数ヶ村の集落が周りを囲まれて輪中を形成し、水利を紐帯とする運命共同体が新たに形成され「浅羽33ヶ村」という言葉が生まれ、これが母体となり、昭和30年に上浅羽村・東浅羽村・西浅羽村・幸浦村の4ヶ村が合併して浅羽町が誕生した。この堤が地域住民に「浅羽」という共同体意識を実感させた絆そのものであった。

昭和30年代まで堤は良好な状態で残されていたが、40年以降の圃場整備によって徐々に削平され、現在ではごく一部に残骸が残るものの消滅した。近世期の記録によると堤には56艘の坊樋があり、その規模は高さ3間、敷幅(下底幅)12間、馬踏(上の平坦部)9尺という大がかりなものであったようだが、現在までに行った堤の調査地点、長溝稗原では基底部の幅12～15m、梅山字宮前では基底部の幅約12mと、箇所によってはかなりばらつきが見られたようである。

松山遺跡は東浅羽の梅山地区に所在し、約6000年前に遡る縄文海進後の海面低下に伴う、砂堤列形成により生じた幅の狭い砂洲上に存在する遺跡で、これまでに縄文土器片や太型磨製石斧、弥生土器片が採集されたことから散布地とされていたもので、遺跡の広がりや地中の遺構状況など、全く不明な遺跡であったが、同じ東浅羽地区の砂洲上の調査結果から類推し、中世には散村集落を形成したと考えられる遺跡で、本格的な集落の形成は近世の新田開発以降と考えられる。



- | | | | | |
|---------|----------|----------|--------------|---------|
| 1. 高道遺跡 | 2. 古新田遺跡 | 3. 馬伏塚城跡 | 4. 浅羽大囲堤松山地点 | 5. 松山遺跡 |
| 6. 大門遺跡 | 7. 山畑遺跡 | 8. 萱間地点 | | |

図2 本報告書掲載の遺跡

第2章 調査報告

1節 高道遺跡

3次試掘確認調査

調査に至る経緯

浅羽町字楠田357-1、359-1、面積2,114㎡の土地に対して店舗造成の計画が進められ、2004年6月に浅羽町教育委員会に対し、埋蔵文化財所在有無の照会があった。東を通る県道の歩道新設工事の排土中に土器が数点伴うのを確認していたので、遺構所在の有無を確認するため、平成16年度浅羽町内遺跡発掘調査等事業として浅羽町社会教育課主事木曾昌司を担当者に試掘確認調査を実施することになった。

調査経過

2004年7月9日 トレンチを6ヶ所設定し、人力で掘削を始める(1～6トレンチ)

12日 南側に2ヶ所トレンチを追加する(7・8トレンチ)

8月3日 バックホーにより1トレンチを拡張する(19×15m)

6日 溝状の遺構を確認し精査を進める

10日 写真撮影、平面図作成を行い、砂を入れ埋戻し作業をおこなう

調査成果

概要 調査地点での基本土層は耕作土を除くと10～15cmの厚みで灰色粘土(N6/0)となり、その下層が灰褐色粘土(10YR6/1)となっている。

最初に設定した1トレンチは他のトレンチと異なり、表土下の包含層からの遺物の出土量が多く、遺構が存在する可能性があったので19×15mの規模に拡張したが、幅80cm、深さ10cm程の溝状遺構(覆土は暗灰色粘土(N3/0))以外は確認できず、これには遺物が伴わず、新しいものと判断された。圃場整備により遺構面が消滅したのであろう。

2～8トレンチは、2トレンチが1.5×1.5m、3トレンチが1.5×1.5m、4トレンチが2×1.5m、5トレンチが1.5×1.5m、6トレンチが1.5×1.5m、7トレンチが2×1.5m、8トレンチが1.5×1.5mの規模でそれぞれ設定し、地山面と認識した灰褐色粘土を10～35cm掘り下げて終了した。

出土遺物 出土遺物はパンコンテナケースに換算して3分の1箱分の土器が出土した。そのほとんどが1トレンチの包含層からの出土で、溝状遺構からは出土していない。これに対し2～8トレンチからは、破片が数点ずつ出土したにすぎず、両者は好対称となっている。

内訳は8割を須恵器片が占め、その殆んどがⅢ期前葉(T K 10平行)の衛門坂産のもので占められ、2点、同時期の模倣坏(6)も含まれ、他に7世紀代の湖西産甕が数点含まれるのが特徴である。

他には12世紀前半(I-1期)の渥美・湖西産山茶碗片、東遠江産山茶碗片、知多産6型式の小皿、同じく13世紀代の甕片、13世紀前葉の景德鎮産青磁碗片(8)、12世紀の清郷鍋片(7)、大窯期の播鉢が見られ、6世紀を中心にその後、12～13世紀の遺物が見られるように、後半はまさに浅羽荘成立と連動するものであろう。

1～5は全て衛門坂産の須恵器で、1・3・4は坏蓋、2は坏身、5は短脚の高坏、円窓が付くタイプと考えられ、坏蓋をそのまま転用して脚を付けた作りをしている。

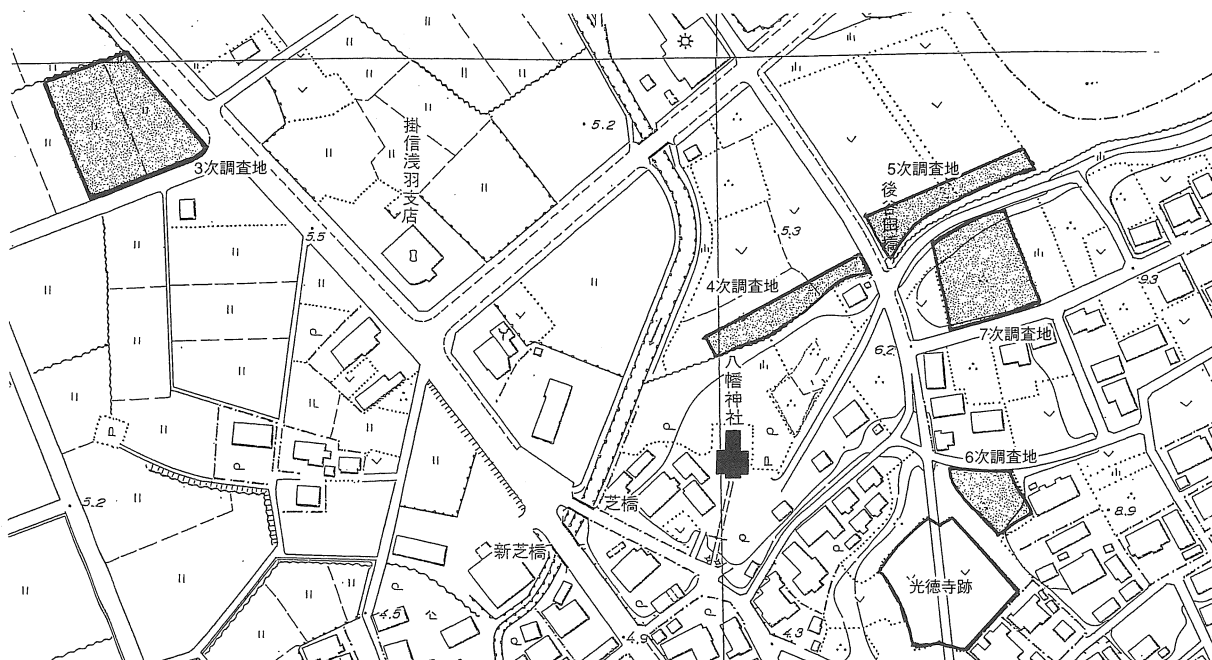


図3 高道遺跡3～7次調査地点 S=1/1,000

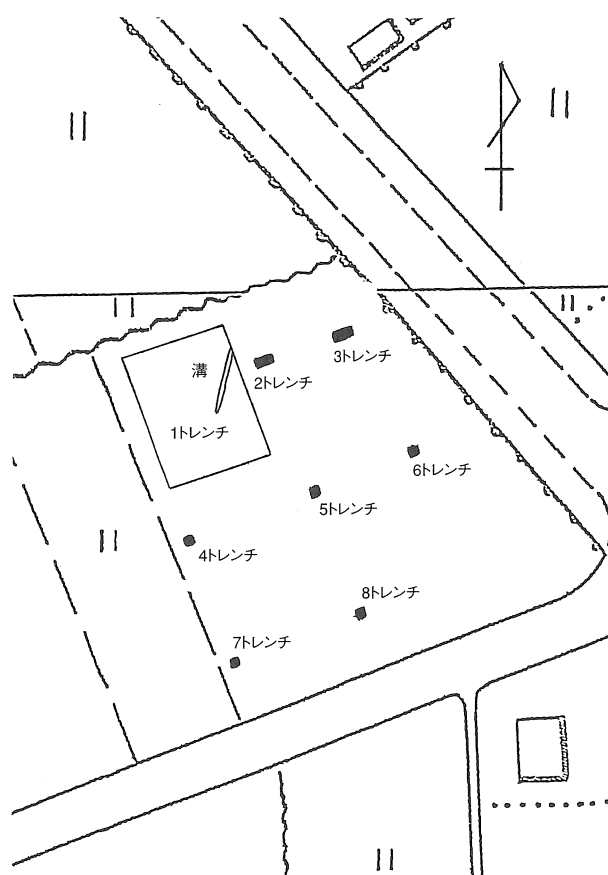


図4 高道遺跡3次調査 トレンチ位置図
S=1/1,000

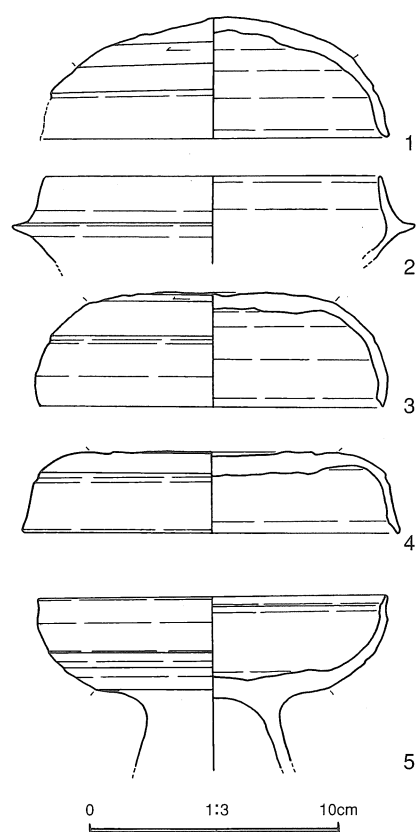


図5 高道遺跡3次調査出土遺物実測図

4 次試掘確認調査

調査に至る経緯

袋井市浅羽23-6他5筆、面積5,234.16㎡の土地に対して建売住宅敷地造成計画が進められ、土地利用計画案が纏まったことから2005年7月に生涯学習課文化財係に対し、埋蔵文化財所在有無の照会があった。

この場所は東に向って延びる幅の狭い谷(この部分で約100m)の入口部に相当し、谷地田として近世以降もっぱら利用される土地であると理解していたが、南隣には小笠山段丘の裾が迫り、そこは浅羽荘の荘園鎮守社として鎌倉期およびそれ以降に成立した「柴春日社」、柴八幡宮の境内地であり、高道遺跡にも隣接することから、関連する遺構や遺物が確認される可能性を考え、計画地の南側にトレンチを設定し、試掘確認調査を実施することになった。

調査経過

調査は2005年8月8日と9日の二日にわたって実施した。0.45㎡のバックホーを用いて西側・中央・東側それぞれに南北方向のトレンチを設定し、西側から1～3トレンチと名付け、順に地山土と認識できる灰色粘土層まで掘削し、バックホーが隣のトレンチに移動すると人力で壁面を削り、断面に遺構が無いかを確認、写真撮影後、柱状図を作成し、9日のうちに全てのトレンチを埋め戻し調査を終了した。

調査成果

概要 1・2トレンチは3×4mの規模で12㎡、3トレンチは4×4mの規模で16㎡、計40㎡の面積を掘削した。調査地は全域に盛土が行われ、1トレンチでは40cm、2トレンチが70cm、3トレンチでは1mと、東へ行くにしたがい、厚くなっている。遺構は3トレンチで東西方向に延びる溝状遺構が断面にかかり、図に示したように標高3.3mの地山面で上面の幅150cm、深さ60cmの規模を持っている。遺構内覆土は二層に分かれ、下層には有機質土が多く含まれている。溝内から山茶碗細片が3点出土した。

5 次試掘確認調査

調査に至る経緯

4次調査地点とは道を挟んで東側にあたる袋井市浅羽2435-1他1筆、面積1,983㎡の土地に対しても集合住宅敷地造成計画が進められ、土地利用計画案が纏まったことから2006年2月に生涯学習課文化財係に対し、埋蔵文化財所在有無の照会があった。4次調査の結果を説明し、同様な試掘確認調査を実施することになった。

調査経過

調査は2006年2月22日と23日の二日にわたって実施した。初日に0.45㎡のバックホーを用いて西側・東側それぞれに2ヶ所ずつ計4カ所のトレンチを設定し、東側から順に1～4トレンチと名付け、1・2・4トレンチは盛土下のグライ化した緑灰色粘土層の確認で留め、4次調査で確認した溝状遺構の続きを探すために設定した3トレンチは、地山面の灰白色粘土まで掘削を行って断面図を作成し、23日のうちに全てのトレンチを埋め戻した。

調査概要

概要 3トレンチの東壁では標高3.7m辺りのレベルで地山土を確認し、その上には15cm程の厚みで有機質を含んだ灰色粘土層が堆積し、この上面から掘り込まれた幅1.7mの溝状遺構を確認した。位置から類推して、4次調査の溝状遺構と同一の溝と考えられる。この試掘調査の掘削に伴う遺物は出土しなかった。

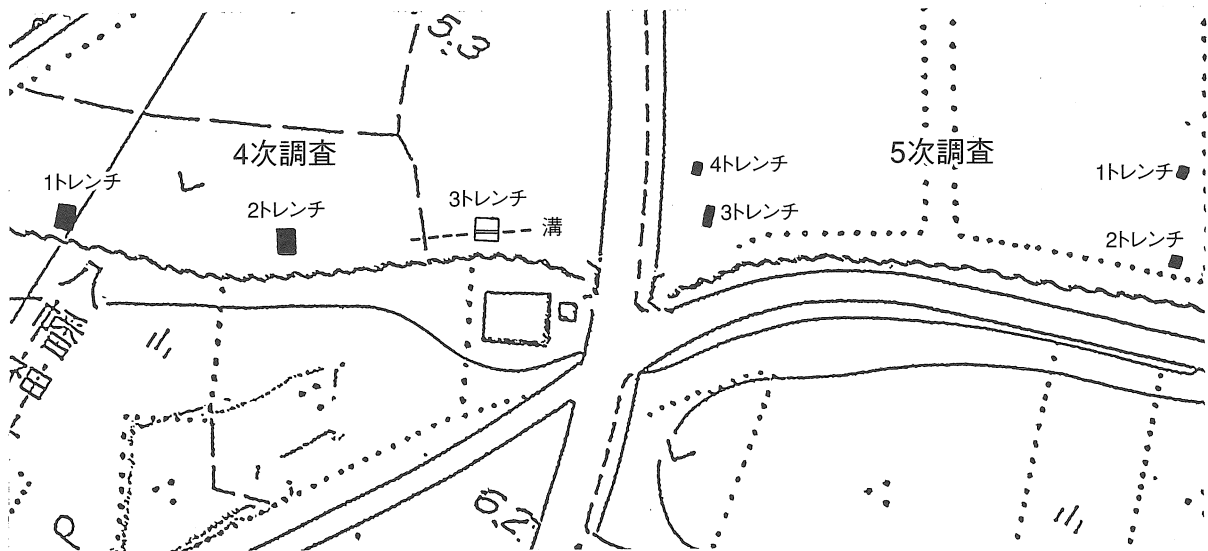


図6 高道遺跡4・5次調査トレンチ位置図 S=1/1,000

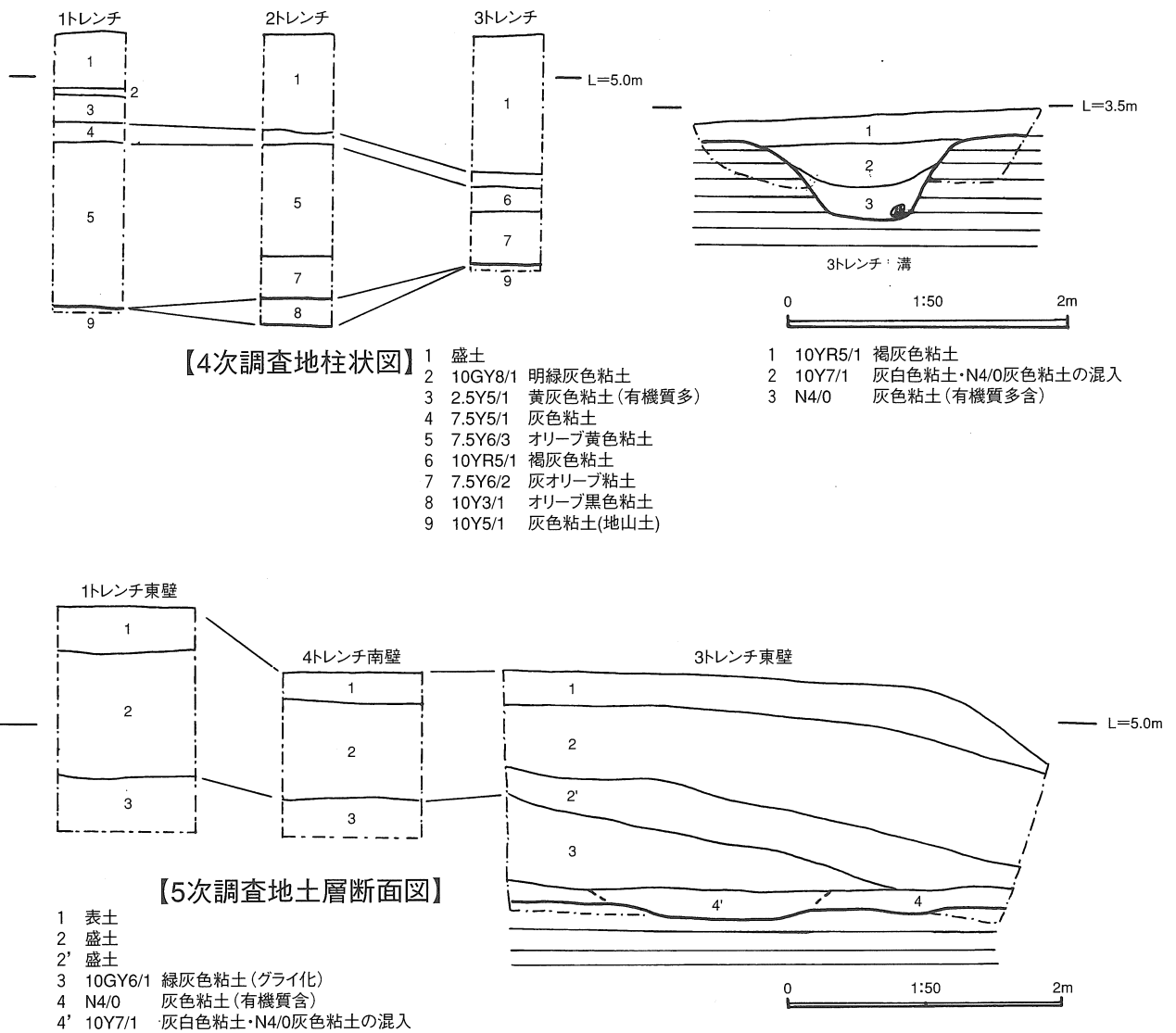


図7 高道遺跡4・5次調査土層図

6・7次試掘確認調査

調査に至る経緯

高道遺跡は弥生時代後期～古墳時代・中世の土器が採取され、比較的早い時期から知られていた遺跡であった。これまで茶園として利用されてきた場所も近年、宅地化が進み、茶園を辞め新たな土地利用を行うため、埋蔵文化財の取り扱いについて各地主より袋井市教育委員会に協議があった。

このうち、袋井市浅羽字芝2309番地の4について高道遺跡第6次調査として地下遺構の残存状況確認のための試掘確認調査を平成18年度市内遺跡発掘調査等事業の一環として実施した。調査対象面積707㎡のうち試掘調査面積は18㎡である。

また、集合住宅の建設に先立ち袋井市字後谷田2428番の1番地についても高道遺跡第7次調査として地下遺構の残存状況確認のための試掘確認調査を、平成19年度市内遺跡発掘調査等事業の一環として実施した。調査対象面積1700㎡のうち試掘調査面積は16㎡である。現地調査は袋井市教育委員会生涯学習課文化財係水野雅彦を担当者として、第6次調査は平成18年10月17日～10月19日、第7次調査は平成19年11月27日～12月5日の期間で実施した。遺構実測図及び写真撮影是水野が行った。

調査方法と調査区設定

6次調査は茶畑となっている申請地の地下に残る遺構状況を把握するため、対象地に5ヶ所のトレンチを設定し人力で掘削した。トレンチは断面観察を中心に行った。土層断面図20分の1縮尺で作成し、記録写真は35mmサイズ原画(カラー)を使用した。

調査成果

6次調査では6-2trでは地上直上まで、6-3trから6-5trでは表土より1m近くまで開墾が行われ地下遺構の存在は確認できなかった。また、調査対象地北西隅の6-1trにおいては

上部が削平されているが一部遺構の残存が確認された。第7次調査でも、7-3tr及び7-4tr以外は開墾による削平で地下遺構の存在は確認できなかった。また、7-3tr及び7-4trでは遺物含層は残されていたが、遺構を確認することはできなかった。この2ヶ所のトレンチは北向き傾斜の低い位置にあり、この斜面から用水を挟んで北西側で行われた4・5次調査の遺構(溝状遺構)へと続く可能性が指摘できるが、想像の域を出ない。

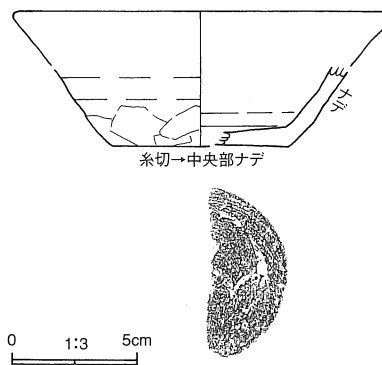


図8 6-3tr遺物包含層遺物実測図

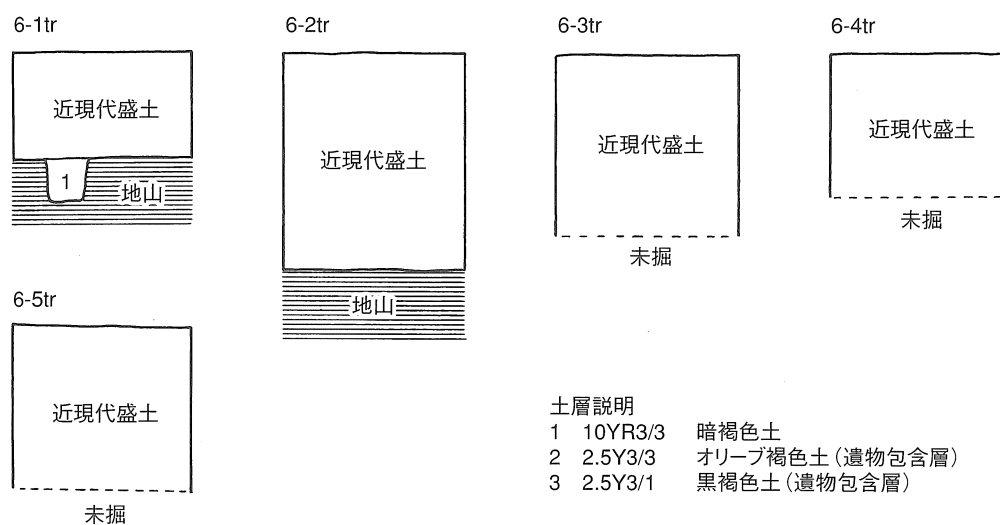


図9 高道遺跡周辺旧地形(昭和42年)



図10 高道遺跡第6・7次調査区トレンチ配置図

第6次調査 トレンチ土層断面



第7次調査 トレンチ土層断面

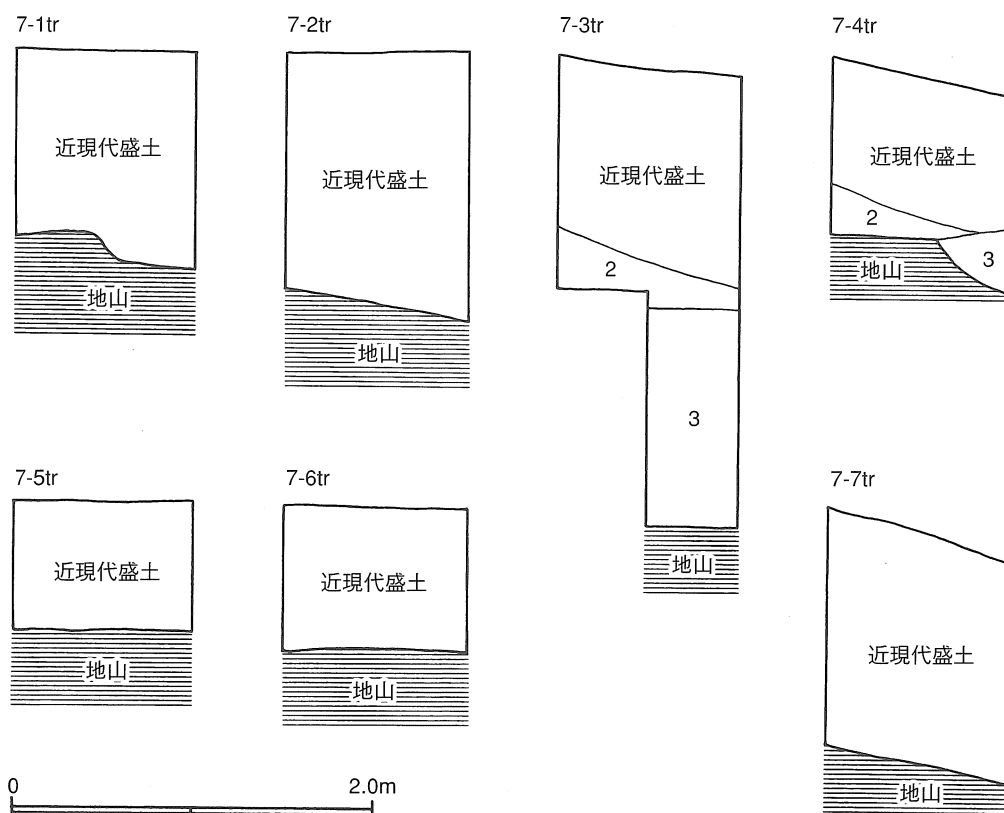


図11 高道遺跡第6・7次調査区トレンチ断面図

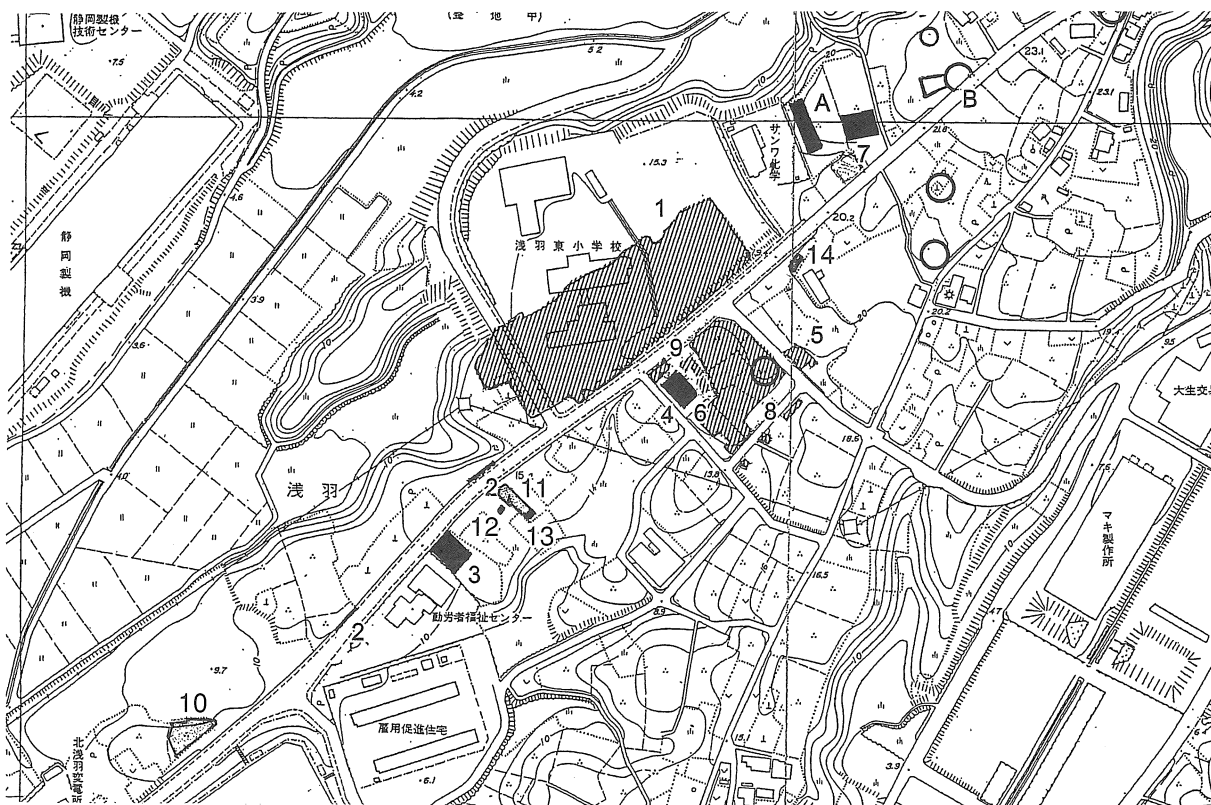


図12 古新田遺跡10～14次調査地点 S=1/5,000

2 節 古新田遺跡

(1) 10次試掘確認調査

調査に至る経緯

袋井市浅羽2960-1他において、特別養護老人ホームの計画が詰められ、2006年2月に生涯学習課文化財係の窓口へ埋蔵文化財所在有無の照会に関係者が来庁された。

現地は古新田遺跡の範囲に含まれており、現状は耕作を放棄した茶畑となっているが、これまでの調査所見から、茶畑の地下に改殖が及んでいない場合、遺構が残されていることが多い実状を説明し、現地確認を行うこととなった。後日、関係者立会いのもと、土地境を確認し、試掘箇所の選定を行った。

調査経過

調査は2006年2月10日～15日の間に、3日間で実施した。最初に視界を遮るように繁茂した茶樹の伐採を行い、伐採後2ヶ所にトレンチを設定し人力で掘削を行い、地山面までの確認を行い埋め戻した。

掘削と並行し平板測量でトレンチの位置を記入した。

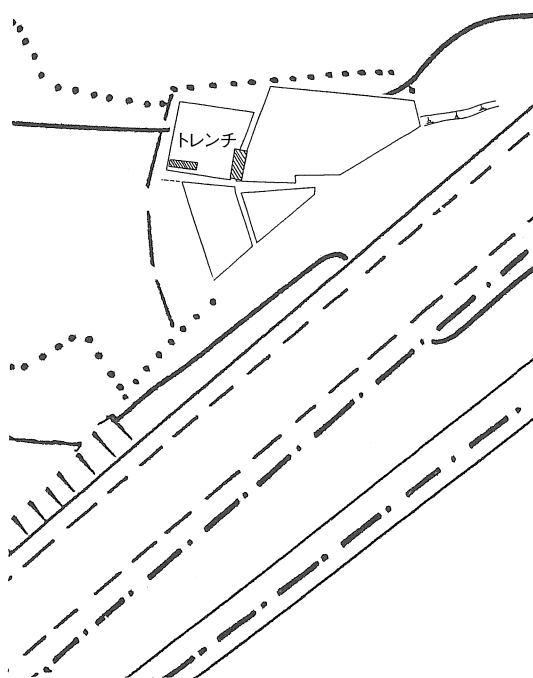


図13 古新田遺跡10次調査トレンチ位置図
S=1/1,000

調査結果

トレンチによって地中の状況を観察したが、全域が攪乱を受けて土が動かされており、瓦礫が埋められている部分も存在した。遺物も伴わず、茶畑の改殖に伴い、遺構は完全に消滅したものと判断された。

(2) 1 1 次試掘確認調査

調査に至る経緯

2004年に浅羽町浅羽2844-1、面積552㎡の土地に対し、地権者より土地相続後の利用について、埋蔵文化財が存在することによる取り扱いの制約が、どのようなものかという相談が浅羽町社会教育課の窓口にあった。

現地の北に通る道路の歩道設置に先立ち1990年に発掘調査を行い、一辺9mに及ぶ5世紀の大型竪穴住居跡1棟の存在が確認されたことを説明し、照会地の地下にも関連する遺構が存在する可能性が高く、何らかの調査を実施して、地下の状況を把握する必要があるという判断を示した。

2005年4月の袋井市・浅羽町の合併後も袋井市内遺跡発掘調査等事業として試掘確認事業は継続された。再度、地権者より試掘調査を望む要望があったことから、調査を実施し、将来の開発に備えて調整資料の蓄積を行うことになった。

現地調査は文化財係 山本義孝、水野雅彦の担当で2006年9月11日～10月13日にかけて実施し、調査面積は140㎡である。

調査経過

- 2006年9月11日 器材搬入後、遺構面確認のため、トレンチを3ヶ所設定し人力により掘削開始、遺構面が残っていることを確認。
- 25日 バックホー搬入。遺構の広がり把握するため面的な掘削を行い、終了後、人力で遺構の確認作業に移る。
- 10月2日 調査区の北側で北面庇付の掘立柱建物跡を確認する。
- 6日 調査区の南側で北面と東面に庇が伴う可能性を持った掘立柱建物跡を確認する。
- 10～11日 写真撮影・遺構の実測を行う。遺構面保護のため、砂を入れる。
- 12日 バックホーと人力によって埋め戻す。
- 13日 器材を撤収し調査を終了する。

調査成果

11次調査の地点では掘立柱建物2棟分以上を確認した。現地は茶畑の造成等による攪乱を受け、20～30cm程の耕作土を除くと遺構が残る地山面となり、遺構は上面が削られ全体に浅い。

この2棟の建物は磁北に対し、主軸を西へ約43度傾けて並び、しかも北側の建物は北面庇付の掘立柱建物跡、南側の建物は少なくとも北面・東面に庇を伴う可能性があり、浅羽東幼稚園駐車場敷地内から発見された2棟の四面庇付建物跡を連想させるものである。

今回の調査は建物の形状を把握することを目的としたので、認識した遺構は遺構確認のため、平面的に2～3cm掘り下げるだけに留めたが、柱穴に関しては柱痕跡を探したのち、半截し断面観察を行い、建物の検討を進めた。

掘立柱建物1は桁行4間(5.5m)以上×梁行2間(4.8m)の身舎の北側に庇が付く建物で、庇を含めると梁行3間(6.7m)規模の建物となる。柱穴の検出は、掘り方内が2.5y5/3・5/4黄褐色土と比較的容易に行うことができた。柱穴の平面は円形で、規模は身舎部分では直径50～70cm、庇部分では30～40cmと一回り小さい。

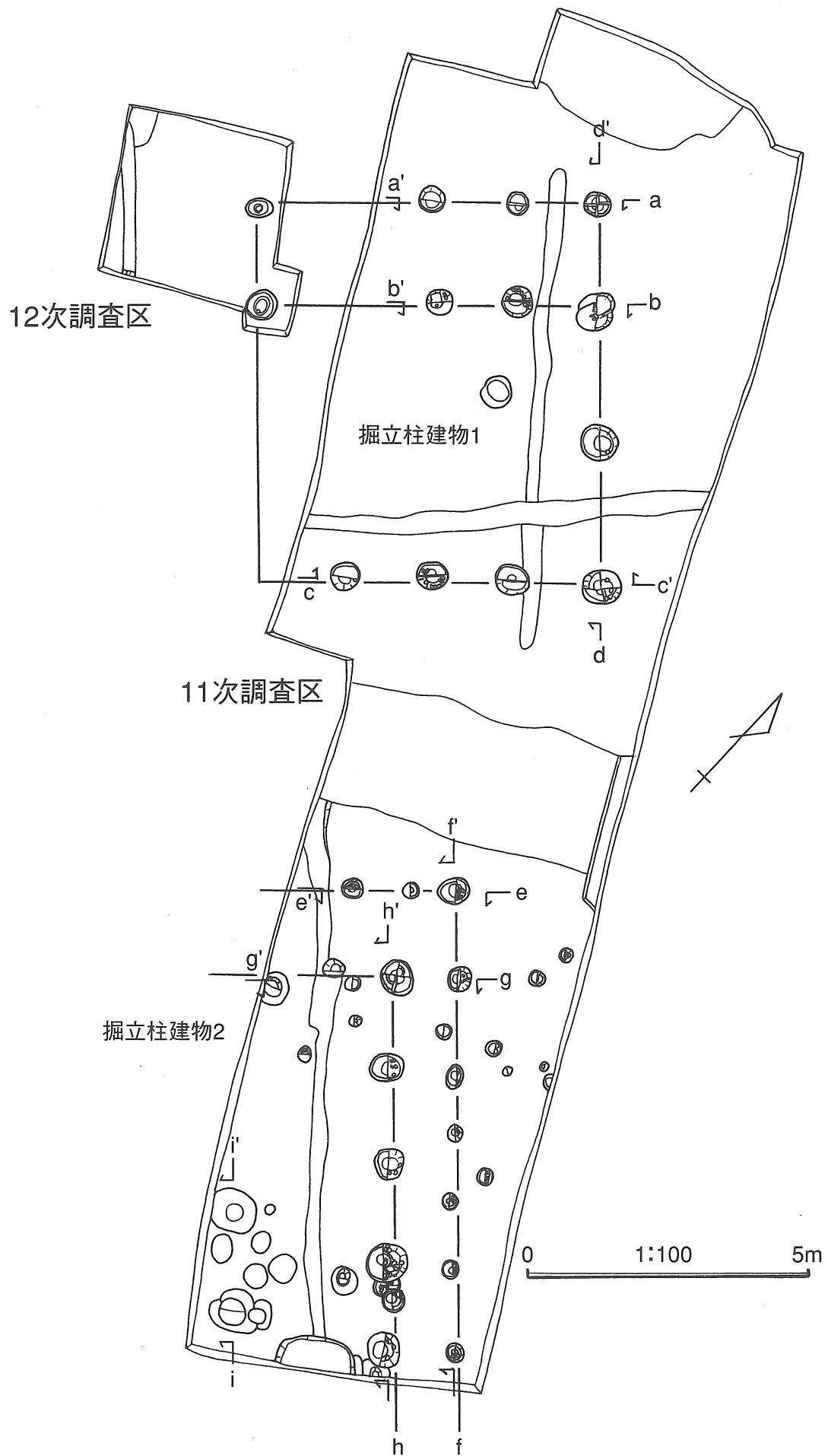


図14 古新田遺跡 11・12次調査全体図

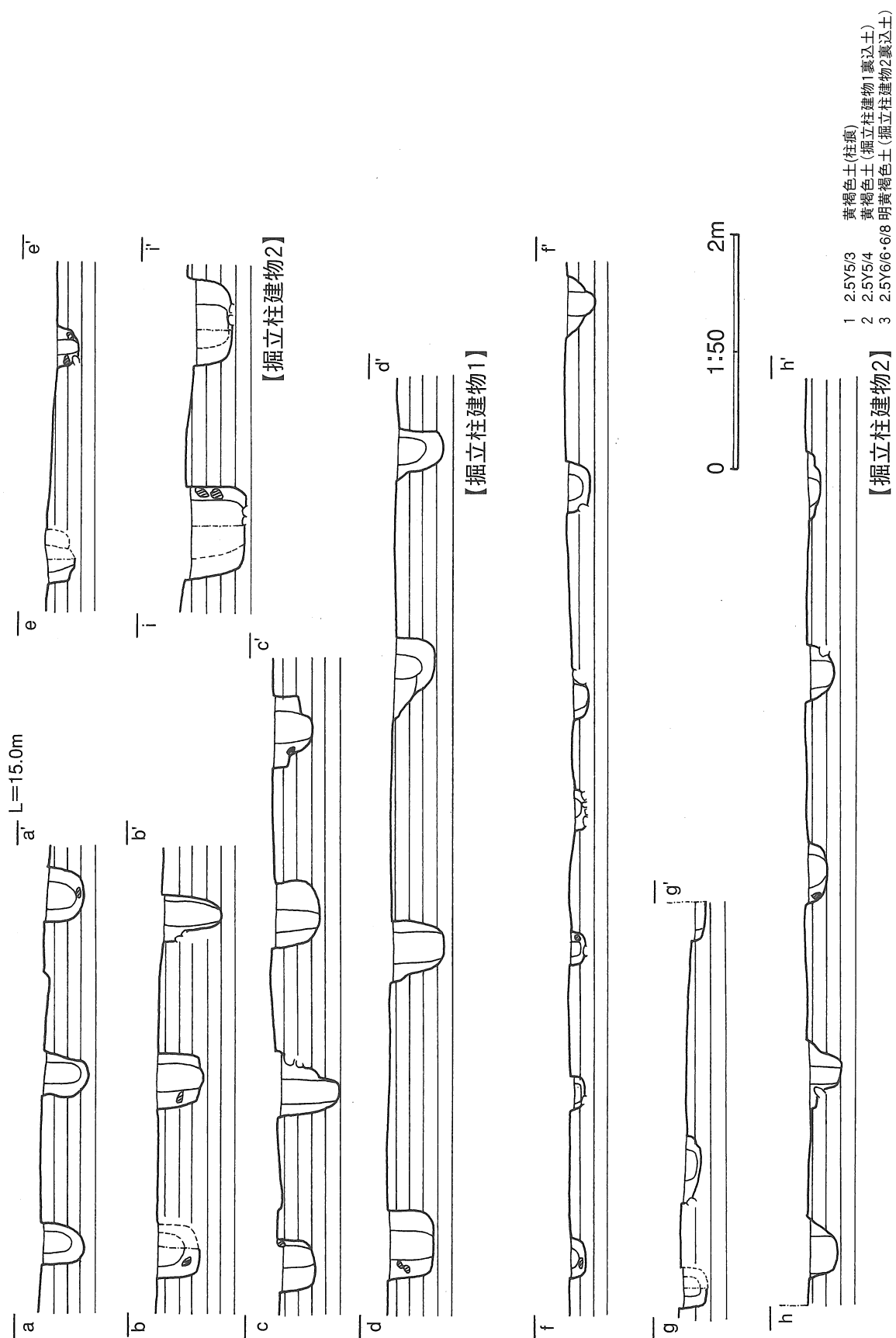


図15 古新田遺跡11次調査 掘立柱建物1・2柱穴断面図

掘立柱建物2は桁行2間(2.3m)以上×梁行5間(7.0m)以上の規模を持つ身舎の廻りに底が付く建物と想定した。

柱穴の検出は、掘り方内の裏込土が2.5y6/6・6/8明黄褐色土と、掘立柱建物1に比べて地山土により近く、柱痕跡が2.5y5/3黄褐色土という具合に認識しやすいのに比べて識別しにくく、半載後の断面観察により検証を行った。掘立柱建物1では重複する建物が無く、建物の想定は容易であったが、この建物には複数の重複する小穴があり、建物構造の把握には調査区を広げての面的な検討が課題として残った。

柱穴の平面形は円形で、規模は身舎推定部分では直径50～60cm、庇推定部分では直径30～50cmとばらつきがある。

(3) 12次試掘確認調査

調査に至る経緯

11次調査によって北面庇付掘立柱建物跡を確認し、西側の桁行の規模が課題となったことから、地権者に依頼して調査を実現した。調査面積は9㎡である。

調査経過

2007年3月22日 トレンチを設定し人力で掘削、柱穴を確認。

23日 写真撮影・図面作成後、埋め戻し調査を終了する。

調査成果

11次調査で確認した掘立柱建物1の規模がこの調査によって確定し、桁行き4間(6.0m)、梁行き2間(4.8m)の身舎に庇(1.8m)が付く建物で、建物の面積は約41㎡であることがわかった。

(4) 13次試掘確認調査

調査に至る経緯

11・12次の調査により予期せぬ重要な遺構の存在を確認したが、掘立柱建物2を庇付の建物と認識してよいのか、その場合に、規模はどの程度のものになるのか、という課題が残され、トレンチを最大限に拡張する必要性が生じた。さらに全体の空撮も行い、記録として保存する必要性も考慮されたことから、地権者の理解を得て平成19年度の袋井市内遺跡発掘調査等事業として、これを実施することとなった。

調査は2008年3月6日～14日にかけて実施し、調査面積は126㎡である。

調査経過

2008年3月6日 0.1m³のバックホーを用いて、11次調査において確認した2棟の掘立柱建物の範囲の埋土を除去し、掘立柱建物2の南側と西側に新たなトレンチを設定した。

10日 トレンチ内の精査を行い、柱穴の確認を進める。

11日 柱穴群の精査。平板測量によって、遺構の平面図を作成する。

12日 ラジコンヘリコプターによる空撮の実施。柱穴・遺構面に保護用の砂を被せる。

13日 0.1m³のバックホーを用いて埋め戻す。

14日 人力により細部の埋め戻しを完了し、器材を撤収する。

調査成果

西トレンチは東側3分の1の範囲で「二線引き」と呼ばれる土地境の南北方向の溝が走り、さらに支溝が西に向かって延びており、11次調査で確認した庇相当部分と身舎相当部分に続く場所に深い攪乱が及び、遺構の確認ができなかった。このため、浅そうな支溝を掘削して溝底に柱の底部分が残存

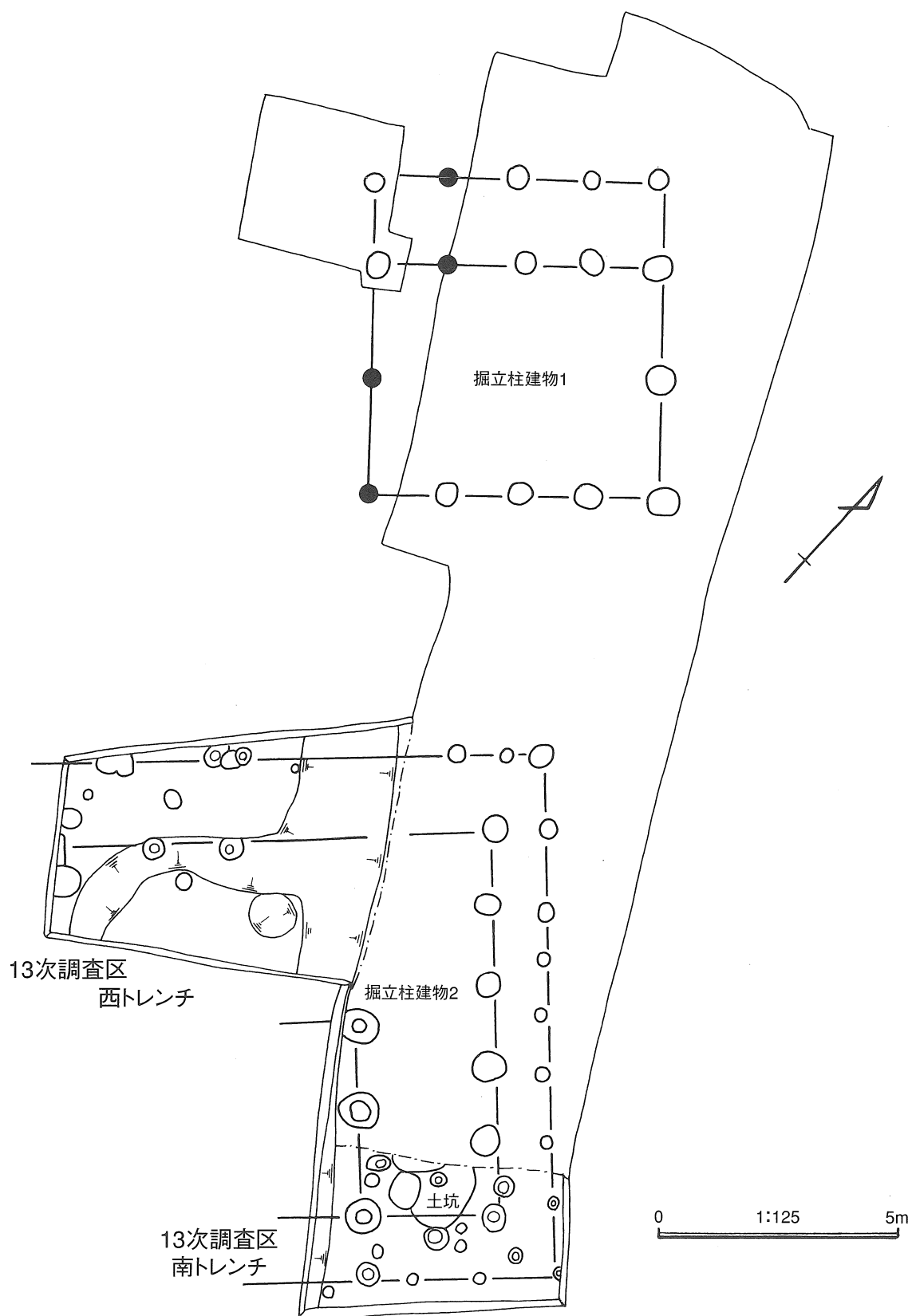


図16 古新田遺跡13次調査全体図及び 掘立柱建物1・2柱穴復元案

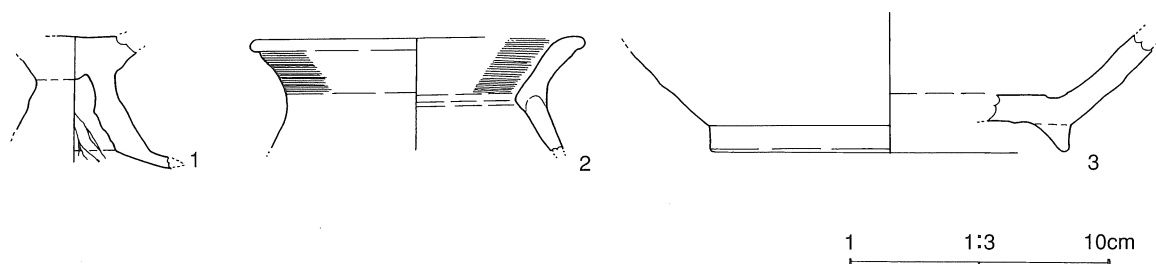


図17 古新田遺跡13次調査 出土遺物

していないか確認したところ2穴分の掘り方をみつけ、これがほぼ延長線上に並び、さらにトレンチ西壁際に柱穴と考えられる遺構が掛ったことから、桁方向の柱列と理解した。

南トレンチからは土坑と複数の柱穴を確認した。これにより掘立柱建物2は桁行4間(9 m)以上×梁行5間(8 m)の身舎の四面に底が取り付く、四面底建物の可能性がさらに高まったが、今回の調査では、遺構保護を最優先し、平面観察に留めたので、詳細な検証は、西側の茶畑の地下に続く柱穴群の確認と、柱穴を裁ち割っての断面観察を待つ必要がある。

出土遺物

出土遺物は遺構確認を行う段階で、南トレンチ土坑の上面から土師器片が8点、西トレンチ境溝の上面から土師器片が1点、知多産片口鉢片1点、常滑甕片2点が出土したが、後者は攪乱後混入したものである。

1は土師器短脚杯、古新田の居館(居宅)部分から出土する遺物の中では新しいTk47平行期である。

2は土師器甕口縁部片、口径13cmと推定。

3は知多産片口鉢の高台部で13世紀前半と推定。常滑甕片は12～13世紀前半と推定される。

(5) 14次試掘確認調査

調査に至る経緯

2008年4月に袋井市浅羽2670-7の地権者より、業者に駐車場として貸している土地を売買し、将来、事務所の建設を考えているが、古新田遺跡の範囲と考えられるため、どのような調査が必要になるかという相談が文化財係にあった。現地は5世紀後半の豪族居館(居宅)の遺構群が見つかった浅羽東小学校・東幼稚園に隣接する土地であり、遺構有無の判断をするための試掘確認調査を行ない地中の状況を把握する必要があり、20年度袋井市内遺跡発掘調査等事業として実施することとなった。

調査経過

調査は2008年7月1日に0.1m³のバックホーを使用して1.6m×8mのトレンチを設定、地山面まで掘削し、その後人力で遺構を確認する作業を行い当日に埋め戻して完了した。

調査成果

精査の結果、地山面から遺構は発見されず、排土中からも遺物が出土しなかった。周辺一帯は浅羽東小学校の開校以後文教地区となり、畑であった周辺部には住宅開発の波が押し寄せ、これに先立って、数次にわたる試掘確認調査が行われたが遺構の発見は無く、現在の浅羽東小学校敷地・浅羽東幼稚園敷地で、居住区域としての古新田遺跡の範囲がほぼ収まるものと考えられ、それより奥側では、6世紀前半の前方後円墳、貫名地B2号墳(全長32.5m、周溝を有する)を盟主墳とする貫名地B古墳群が存在する墓域になるものと想定される。

3 節 馬伏塚城跡

(1) 11次試掘確認調査

調査に至る経緯

馬伏塚城本丸における地下遺構確認のため、袋井市浅名1185-1で2006年に実施した9次調査によって、その前身遺構である集石墓群をはじめとし、一石五輪塔・宝篋印塔を持った中世墓群、今川氏領国時代の馬伏塚城主小笠原氏の菩提寺である天岳(天嶽)寺と推定される建物跡、さらに天正2年(1574)に徳川家康が大須賀康高に命じて大がかりな修築を命じた馬伏塚城に伴う柵などの遺構が良好な状態で残されていることが確認され、馬伏塚城跡の位置付けと今後の保護に関する基礎資料を蓄積することができた。

同じ地籍の中で、更に西側に9次調査時の排土置場とした5m幅の未調査地が残っていたので、翌年の平成19年度袋井市内遺跡発掘調査等事業として、11次試掘確認調査を実施した。

調査面積は34㎡である。

調査経過

2008年1月7日 器材を搬入し、草刈作業を実施、翌日より表土を人力で掘削し始める。

18日 第一遺構面で溝1の上面を確認、遺構内を掘り下げる。

24日 発掘区壁面の土層断面図作成。

25日 包含層を掘り下げ、下層遺構の検出にかかる。

2月20日 全景・遺構別の撮影。測量を始める。

22日 遺構平面図にレベル記入、遺構の縦断面図作成。

25日 遺構面全体に保護用の砂を入れ、排土を戻して被覆する(補助事業の終了)。

3月14日 現地での残務処理を終了。



図18 馬伏塚城跡11・14次調査地点 S=1/3,000

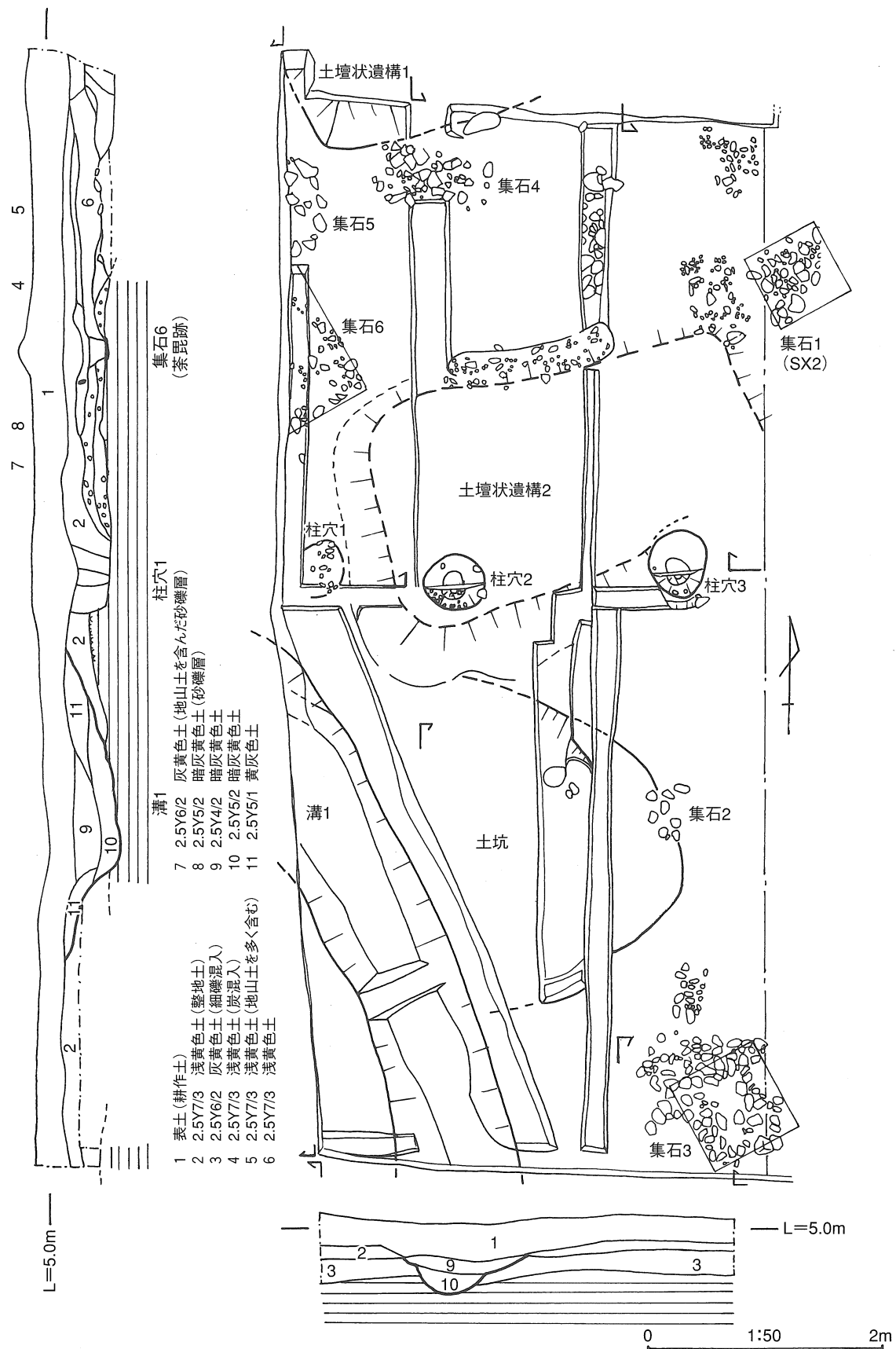


図19 馬伏塚城跡11次調査全体図

調査成果

土層 土層堆積は耕作土を除くと、整地土(浅黄色土・2.5y7/3)が10～20cmの厚さで全体に見られ、この下層に南側では細礫が混入する灰黄色土(2.5y6/2)が、北側では一部砂礫層(2.5y6/2)や灰黄色粘質土(2.5y7/2)が堆積し、地山土(明黄褐色土・2.5y7/6)となっている。

遺構面 遺構面は2面あり、上面は整地土上面から掘り込まれた溝1、柱穴1～3であり、これは現存する土塁と一連の遺構で修築後の馬伏塚城のものと理解している。下面では地山を削り出し、一部に盛土を行って整形した長方形の土壇状遺構2基、土坑1基、集石6基を確認した。他に図19中には礫・細礫が集中する箇所を図示したが、これは整地土中に混じったもので、遺構とは認定できなかった。

溝1 上面での幅1m、深さ30～35cmの溝で4.8m分を確認した。この西側には「馬伏塚城絵図」(広島浅野文庫蔵『諸国古城之図』所収)によると西丸(西曲輪)が描かれており、その入口部分に溝が設けられていたのであろう。覆土は上層が暗灰色土(2.5y4/2)、下層が暗黄灰色土(2.5y5/2)である。

柱穴 柱穴1は平面観察ではプランが判別しにくく、西側壁断面で認識した。柱穴2は径50cm、深さ30cmの規模、柱穴3は径50cm、深さ40cmの規模を持つ。3穴はほぼ線上に並び柵列を想定させるが、柱間にばらつきがある。

土壇状遺構1 馬伏塚城の土塁下に埋め込まれた遺構で、地山を長方形に削り出し一部に盛土を施し、9次調査でSL1とされたもので、その南西コーナー部分を確認した。南側裾には30cm大の石が一個残る。やはり9次調査で30cm大の石が裾に置かれている状況を確認しており、本来は数段の石積であったと考えられる。

土壇状遺構2 上面を3.2m×1.8mの規模に削り出した隅丸長方形の土壇状の遺構で、南北に延ばしたサブトレンチの断面(図20a-b)部分では基底部の幅3.7m、高さ50cm程の規模を持っているが、遺構保護のため、周りは掘り下げず、サブトレンチを設けて断面観察を行うだけに留めた。土壇状遺構1や集石と同じ方向を向くので、一連の施設であると理解できる。

土坑 灰黄褐色土の埋土を削る過程で確認した土坑で、楕円形を呈する。サブトレンチを掘り下げたところ、北側では-60cm、南側では-30cmの部分から下は礫ばかりとなり、一気に埋めているものと判断された。形状から、井戸状の遺構と考えている。

集石 6基確認した中で、集石4は他のものと方向が異なり、レベルも高いことから、別のものと判断したが、他の集石は墓と認識しており、このうち、集石3・6の下面では焼土と炭層が確認されるので、茶毘に付したのち、集石したのであろう。集石3は縁石が明瞭で、1.0m×1.1mの規模を持っている。西壁断面に掛る集石3は、断面観察によると、盛土(砂礫土)を行った高まりの上で茶毘に付し、その上に石組を行ったものと判断された。

出土遺物 遺物はパンコンテナケースに換算して5分の1箱分が出土した。大半は整地土中のものである。内訳はかわらけの細片が半数を占め、残りは常滑甕片や瀬戸大窯期の播鉢や陶器片である。年代が判定するものは15世紀末～16世紀前半の馬伏塚城以前のものが大半を占めている。

1・2はかわらけで、土壇2南側に設けたサブトレンチで確認した掘り込みの底部から伏せた状態で出土した。15世紀末～16世紀初。

3は渥美湖西産山茶碗でⅠ-1期前半、12世紀前半のもの。土壇2北側整地土内から出土。

4は瀬戸大窯1期の平碗で削り出し輪高台が付くタイプ、15世紀末～16世紀初で整地土内から出土。

5・6は瀬戸産播鉢、5は19世紀代で溝1の肩部から出土。6は15世紀末～16世紀初で土坑の埋土内から出土。

7は常滑産10期の大甕で15世紀末～16世紀前半、集石5側の整地土内から出土。

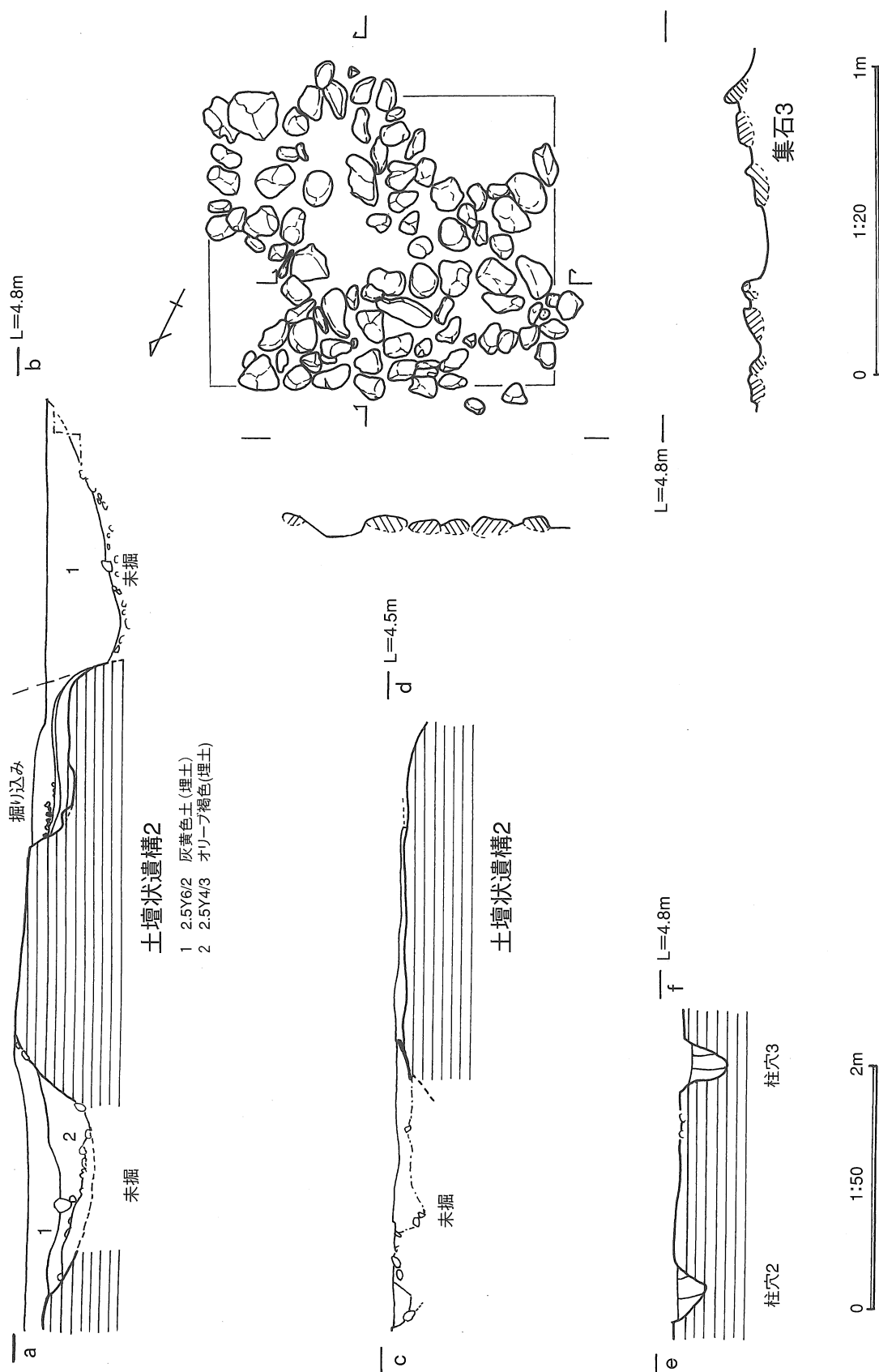


図20 馬伏塚城跡11次調査 遺構断面図・集石3実測図

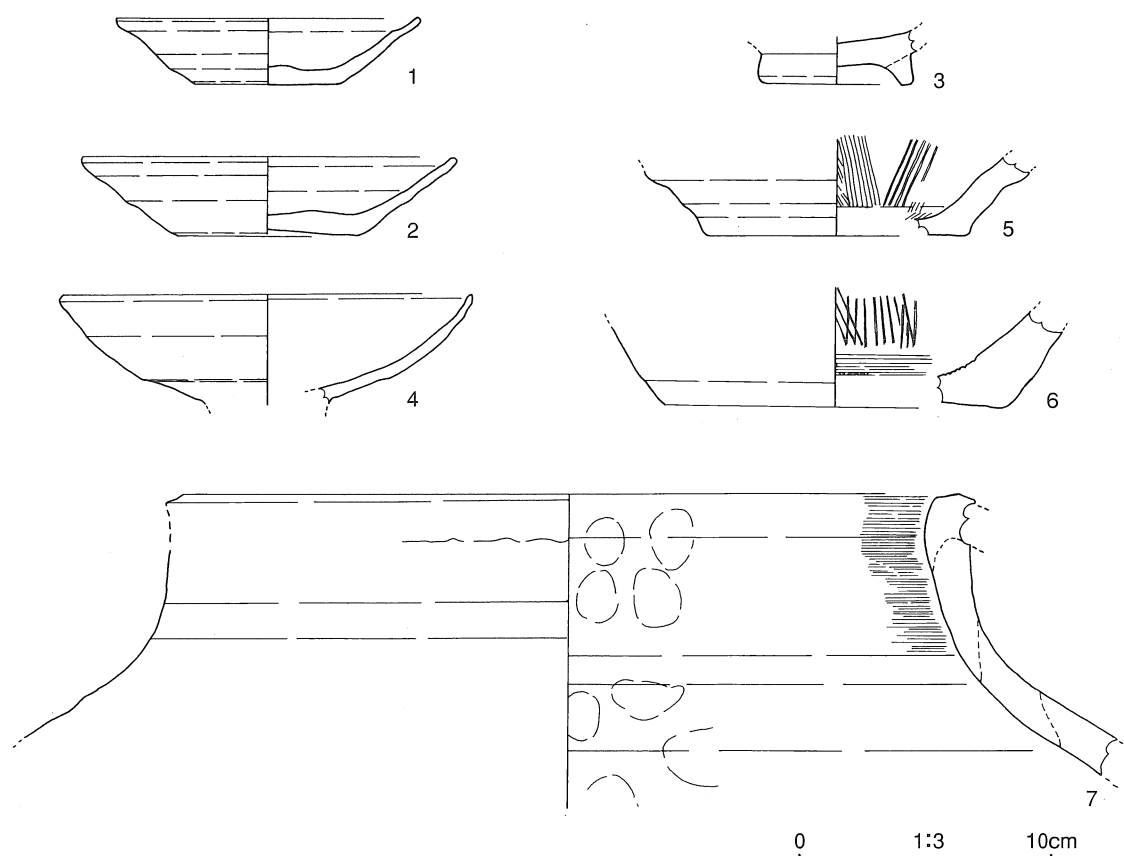


図21 馬伏塚城跡11次調査 出土遺物実測図

(2) 14次試掘確認調査

調査に至る経緯

馬伏塚城の居館域と推定している東西150m、南北200mの3万㎡に及ぶ方形区画は、廃城後、近世前期には岡山村の中心部として土地利用が行われて全域に個人住宅が立ち並び、馬伏塚城に関する遺構が実際に存在するのか確認することが困難な状況にあった。

しかし、土地所有者の協力により宅地内の畑地の提供を受け、2005年7月12日から8月1日にかけて7次調査を実施することができた。21㎡の小規模なトレンチではあったが、近世岡山村以前の遺構群が地中に存在することを確認できたので、2008年度には周辺にトレンチを広げ、遺構が広がる範囲、年代の裏付けとなる資料の蓄積を目的として14次調査を実施することとなった。調査面積は40㎡である。

調査経過

2008年12月11日 器材を搬入し、東区・中央区の二箇所に分けてトレンチを設け遺構検出にかかる。

2009年1月13日 中央区で複数の柱穴を確認、測量用の基準杭の設定。

14日～ 柱穴の半截を行い、断面観察を進め順次写真撮影を行う。

26～29日 トレンチ平面図・柱穴断面図の作成。

2月3日 全景写真の撮影を終え、遺構面に砂を被せ排土で被覆を行う。

4日 東区の遺構精査に移る。～9日 土層断面図・平面図作成、写真撮影を進める。

19日 中央区・東区の埋め戻しを完了し、調査を終了する。

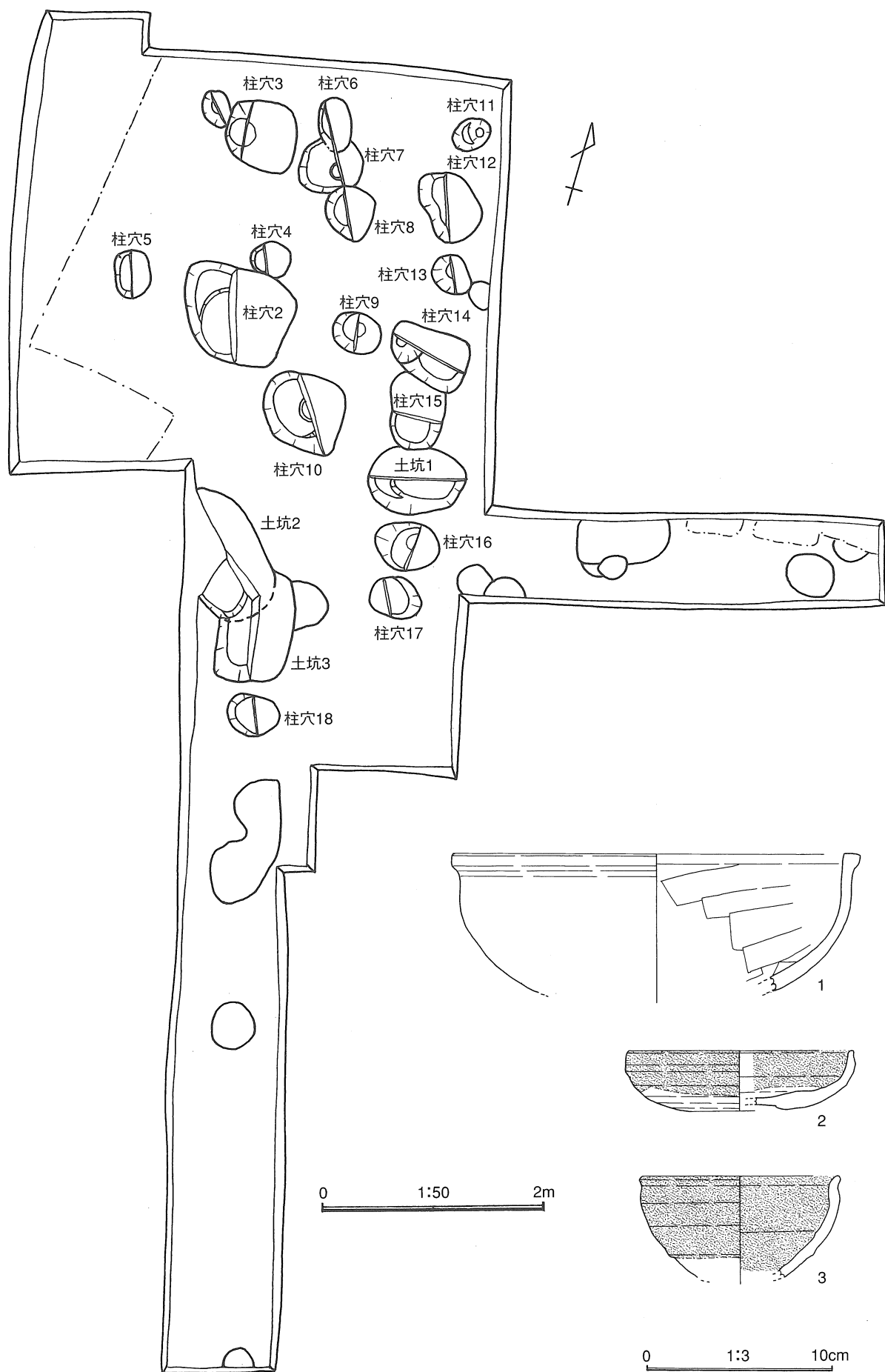


图22 馬伏塚城跡14次調査 中央区全体図・出土遺物実測図

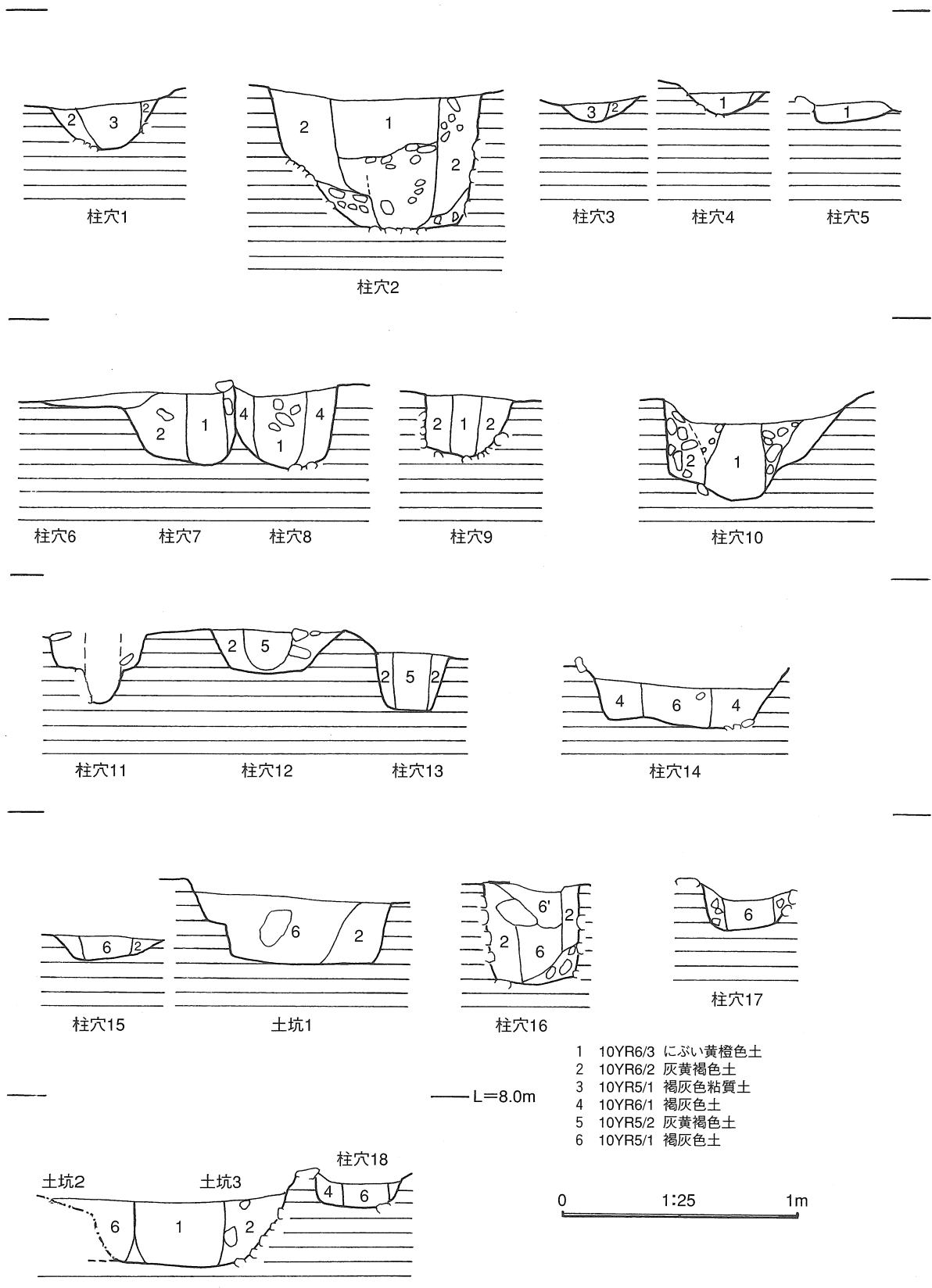


図23 馬伏塚城跡14次調査 中央区遺構断面図

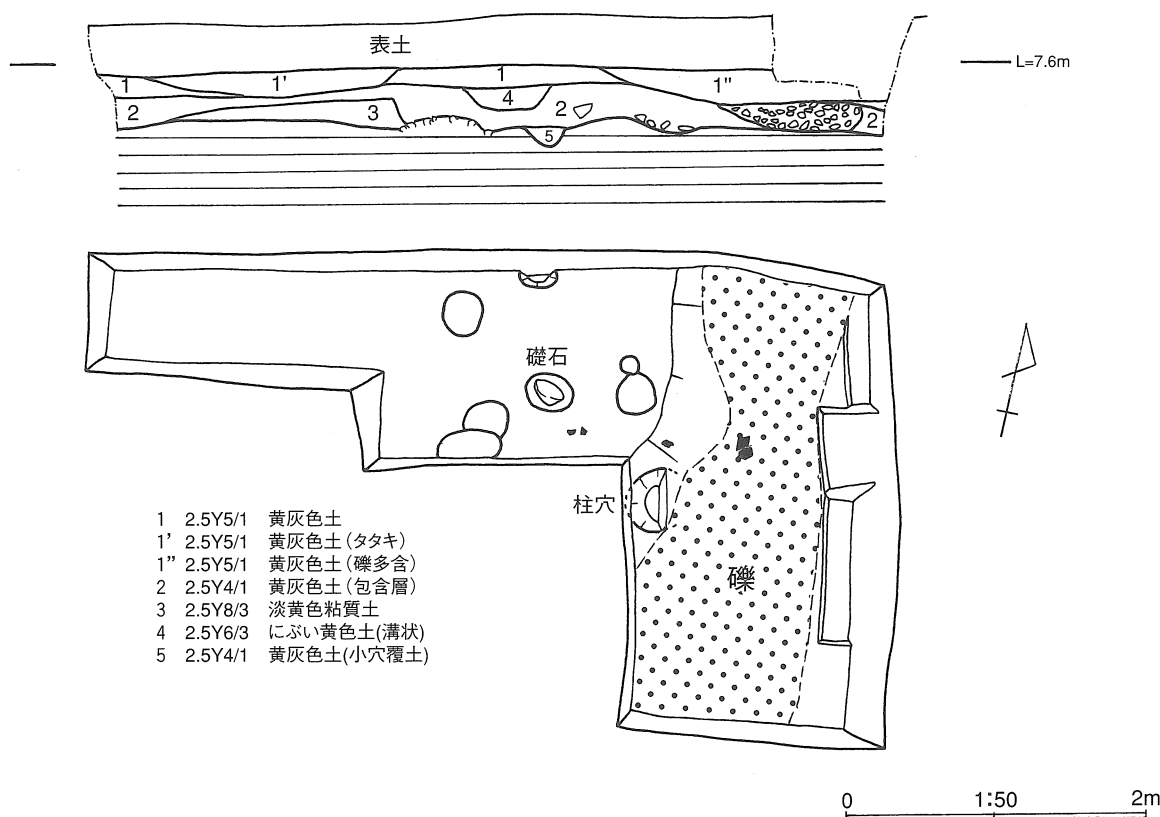


図24 馬伏塚城跡14次調査 東区全体図

調査成果

中央区は地表から40～60cmの厚みで耕作土と畑の改殖に伴う攪乱土が堆積し、これを取り除くと小笠山段丘の地山土となり、上面を削られた遺構が攪乱の浅い部分で確認できた。

ここからは25ヶ所の遺構を確認し、このうち21カ所を半截して遺構の性格を検討した。内訳は柱穴が18基、土坑が3基である。柱穴は密集するが、面積が狭く現地での組み合わせはわかっていない。

柱穴2は一際大きく、不整形だが幅90cm、深さ60cmの規模を持つ。礫混じりの地山土を掘削しているので、壁一面に地山礫が剥き出しとなっている。柱穴1・15と組み、建物を構成したものと推定している。見つかった3基の土坑は全て平面形が楕円形を呈して底は平らで、長さ80～120cm、幅60～70cmの規模を持っている。

東区は戦前頃まで駄菓子屋を設けており、その建物に関する整地が深く及んでいた。特に東側は緩く傾斜し、水が浸み出てくるので礫を入れた上に整地土を乗せている。

攪乱の及んでいない中央部の地山面からは、径25～40cmの小振りの柱穴7基が集中して見つかった。このうち、1基は礎石を持つ柱穴である。

出土遺物はパンコンテナケースに換算して、3分の1箱程の土器片が出土した。大半が中央区の攪乱土中からで数点の山茶碗片を上限とし、16世紀後半の陶器類が含まれるが、中心はそれ以降である。遺物の傾向からは馬伏塚城廃城後に遺物の中心があり、了教寺に関連した施設の可能性が考えられる。

1は16世紀後半頃の瓦質の鍋か、外面にミガキが施され類例を知らない。柱穴13より出土。

2は志戸呂産向付、大窯Ⅳ期平行。柱穴2より出土。

3は瀬戸産天目碗、体部が丸みを帯び大窯Ⅲ期新段階、16世紀後半、攪乱土中から出土。

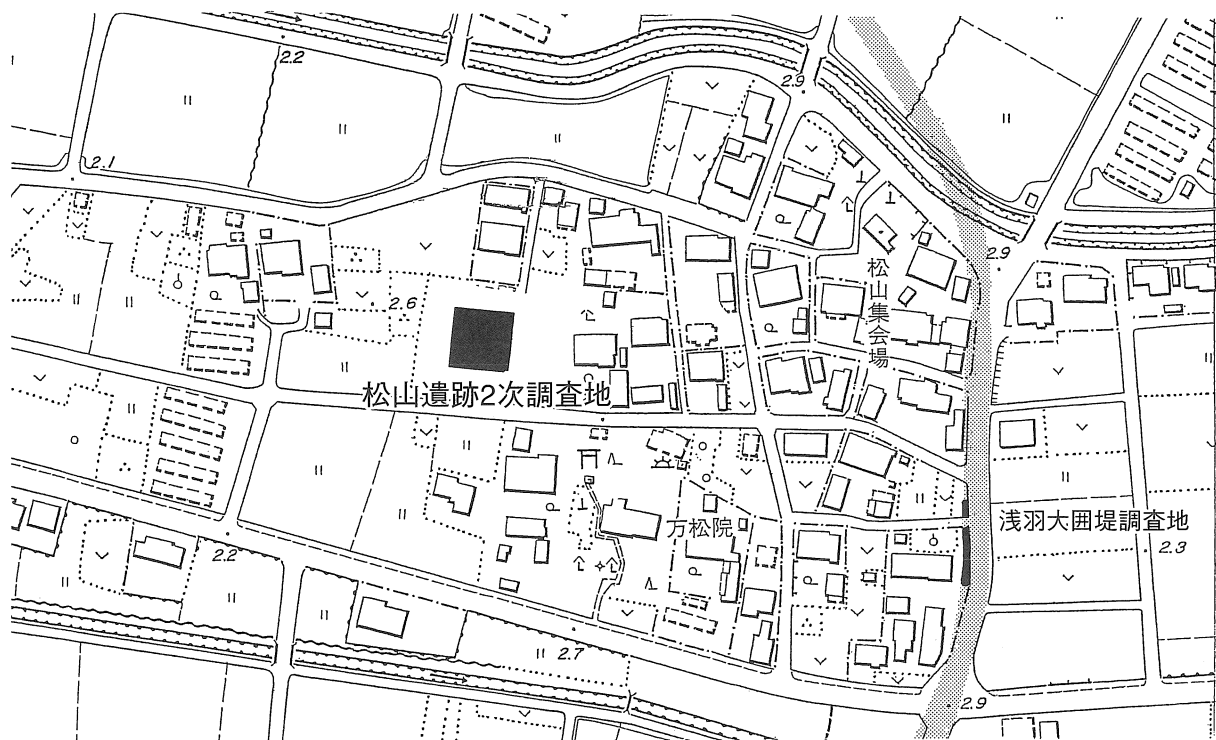


図25 松山遺跡 2 次調査・浅羽大囲堤調査地点 S=1/2,500

4 節 松山遺跡・浅羽大囲堤

(1) 松山遺跡 2 次試掘確認調査

調査に至る経緯

松山遺跡が所在する東浅羽地区は、約6000年前に生じた縄文海進後の海面変化に伴って形成された砂洲よりなり、遺跡はその東端に位置する。これまでに水田下50cmの淡暗褐色砂層内から太形蛤刃石斧が、畑作業中に縄文土器片や弥生土器片が採集されたことによって、散布地とされてきたが、調査が実施されたことはなく、詳細については全く不明であった。

近年、砂洲上の畑地にも住宅が建ち始め、開発行為の調整に伴う基礎資料の集積が必要となってきたことから、2007年8月に試掘確認調査を所在調査事業の中で実施し、砂層中に遺構が存在することを確認した。さらに詳細なデータを蓄積するため、平成19年度の袋井市内遺跡発掘調査等事業として2次調査を実施した。調査面積は22㎡である。

調査経過

現地調査は2008年1月7日から16日にかけて実施した。調査はコの字状に3本のトレンチを設定、0.1m³のバックホーを用いて耕作土を除去し、壁面を削り、土層を確認しながら砂層を掘り下げた。

1 トレンチでは包含層を確認したので、人力による精査に切り替え、2 トレンチは柱穴の掘り込み面で掘削を止めた。3 トレンチは包含層や遺構が発見されなかったため、西隅を深く掘って土層堆積の確認を行い、西側3m分の土層図のみ作成した。記録は断面図を中心とした図化と写真撮影を行い、再び0.1m³のバックホーを用いて埋め戻した。

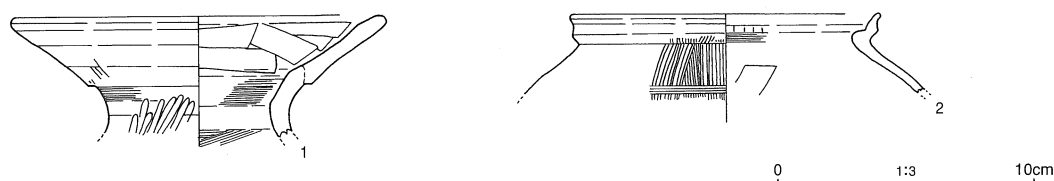


図27 松山遺跡2次調査 出土土器

調査成果

東西方向の観察を意識した1トレンチでは、遺物や有機質が含まれないオリーブ黄色砂層を地山土と認識した。この直上、西側には灰色砂質土が堆積し、この土層中に古式の土師器片と清ヶ谷産灰釉陶器片が混入しているが、遺構ではなく窪地に堆積したものと考えられる。灰オリーブ色砂質土上面から掘られた溝を1条確認した。

南北方向を意識した2トレンチからは、1棟の掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴を3基確認した。3トレンチは砂洲南斜面に相当し、遺物包含層や遺構は確認できなかった。

出土遺物は細片だが1トレンチ西側の灰色砂質土から土師器片9点、灰釉陶器片5点が出土した。

1は二重口縁壺、2はS字甕でいずれも細片から反転復元した。

(2) 浅羽大囲堤

調査に至る経緯

近世初頭に成立した浅羽大囲堤は、昭和40年代から始まる圃場整備事業によって消滅したとされるが、今も残骸の一部が数箇所に残されている。松山地区で拡幅が進むふさと農道によって、その一部が削られることとなり、事前に残存部全域を測量し、トレンチを設けて構築状況の記録を作成することとなり、平成19年度の袋井市内遺跡発掘調査等事業として調査を実施することになった。

調査は2008年1月17日～24日の期間で実施し、約150㎡の範囲を図化し、トレンチ一箇所、5㎡の範囲を掘削した。

調査経過

個人住宅敷地内に1箇所のトレンチを設け人力で掘削し、土層断面の観察を行い、断面図を作成し、記録後、人力で埋め戻した。次に残存部とその周辺を100分の1の縮尺で平板実測し、50cm間隔で等高線を記入して調査を終了した。

調査成果

堤は最も残りの良い北側の部分で幅約6m、高さ約1.6m分が残されている。本来の幅は不明だが、記録によると高さ三間(5.4m)、敷幅(下底幅)十二間(21.6m)、馬踏(上面の平坦部)九尺(2.7m)という規模からすると、西側基底部の一部が残っているに過ぎないことになる。

トレンチの土層断面を見ると、集落側の裾には溝が設けられ、盛土は水平方向に黄灰色粘土の固まり(2.5y5/1)と、灰オリーブ色土(5y6/2)を水平方向に互層にして積み上げていることがわかる。

2009年2月10日にふさと農道拡幅工事の掘削に立会い、水平方向に截ち割られた断面のうち、土層堆積が顕著な2箇所(c-d、e-f)を選び、幅2m分の土層断面図を作成し、図上に追加した。

堤の盛土は標高2m前後の自然堤防上へ水平方向に砂質土と粘質土を互層に積み上げている状況が観察されたが、断面中には明確な遺構や遺物は確認されず、堤が設けられた場所は、使用されていない場所を選んだものと理解した。

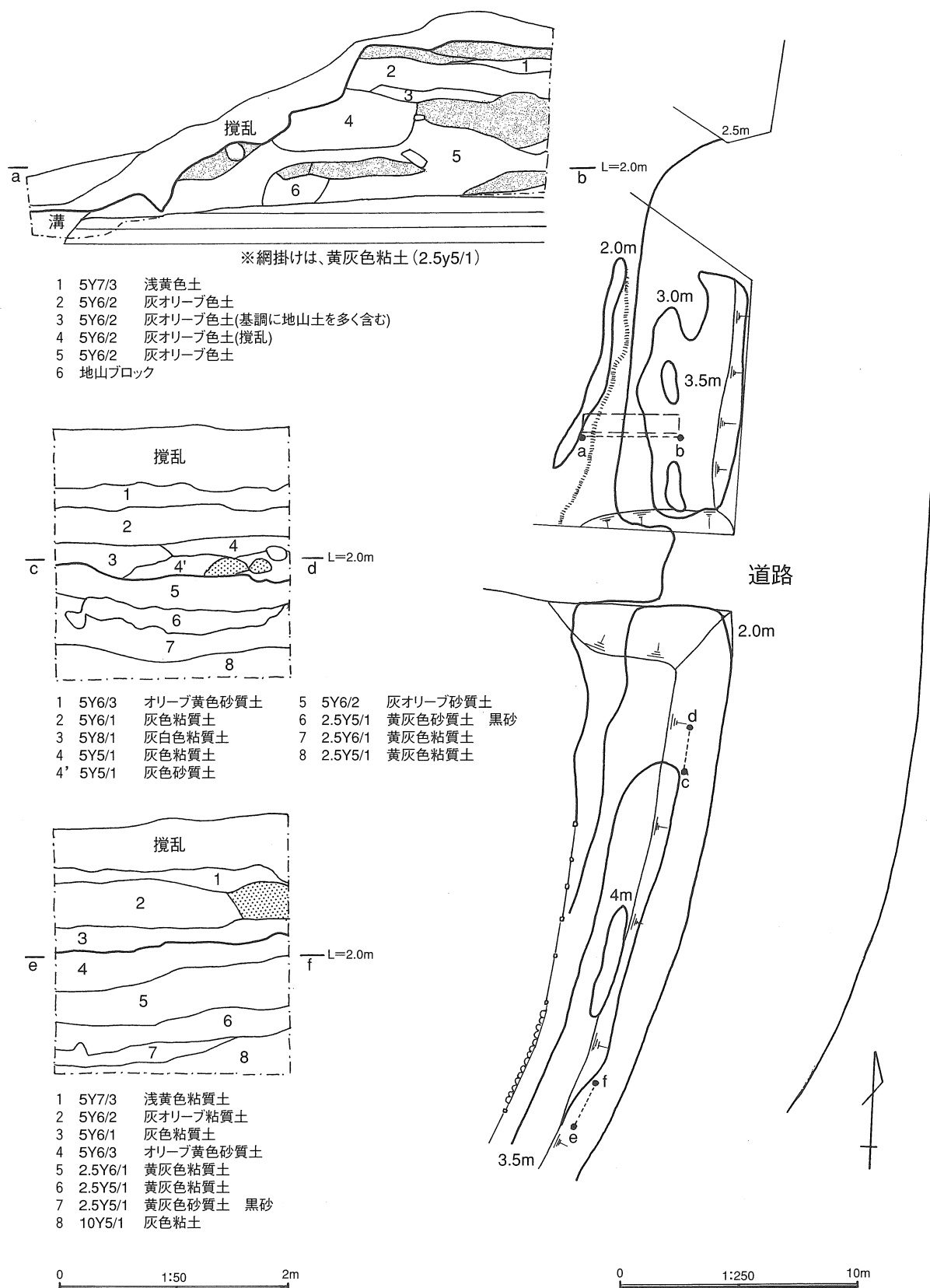


図28 浅羽大囲堤平面図・土層断面図

5 節 大門遺跡

(1) 遺跡をめぐる環境

地理的環境

袋井市は静岡県西部に位置し、遠州灘に臨んでいる。南北に長い市域の北東から西側にかけて斜めに太田川が南流し、中央部には掛川市より西流してきた原野谷川が大きくその流れを南に向け、太田川と合流し太平洋へ注いでいる。

その原野谷川が流れを南側へ変える地点の北側には旧東海道の宿場町として発展した袋井地区、そして南側にはJR東海道線袋井駅を中心に栄えた高尾地区が位置している。太田川、原野谷川の両岸に広がる沖積地は袋井市北部、中央部の穀倉地帯となっている。市南部の東側には小笠山丘陵が位置し、市域に含まれる西山麓は小笠沢川や弁財天川、三沢川などの小河川によりやや大きな谷が形成され、縄文時代の集落遺跡である長者平遺跡や大畑遺跡が確認されている。尾根の支稜裾はさらに細かく開析され、浅く短い支谷と尾根が複雑に入り組んだ地形を呈している。

原野谷川は掛川市内北端の八高山に源を発し、蛇行を繰り返しながら南進して、小笠山丘陵付近で方向を変え西流する。その後、丘陵の西裾を回るように再び南に向かい、太田川と合流する。

大門遺跡は、小笠山丘陵が西へ伸びた尾根が原野谷川と接する標高18mから20mの段丘上に立地する。段丘面は比較的平坦で、北東側から南西へゆるやかに傾斜する。この段丘は明治21年(1888)に東海道鉄道(現JR東海道本線)敷設によって南北に分断されたことにより、本来同一の遺跡と考えられるものが分断され東海道本線北側を掛之上遺跡、南側を大門遺跡と呼称している。

歴史的環境

大門遺跡での人々の営みが始った時期については、それを物語る遺構が検出されていないため不明

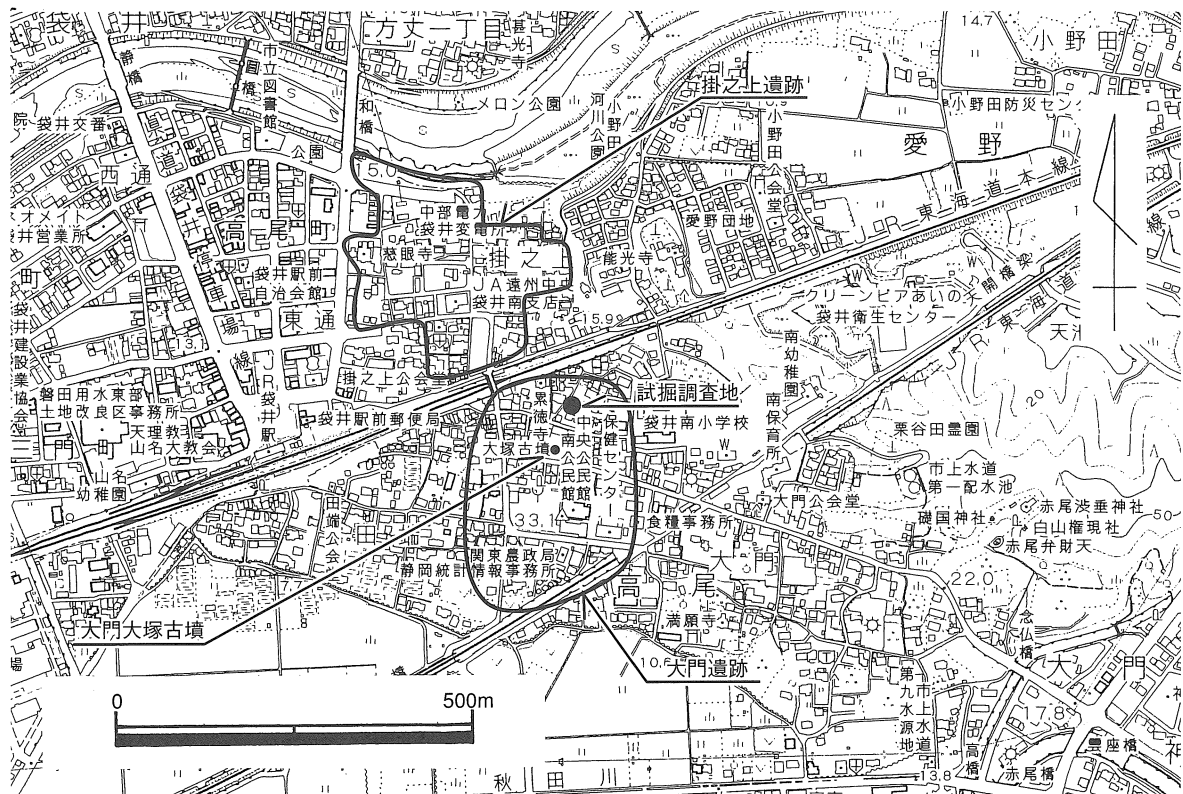


図29 大門遺跡試掘確認調査位置図

であるが、掛之上遺跡において縄文時代中期の土器片及び石器が少量出土することから、本遺跡から南東約2kmに縄文時代中期の集落遺跡である長者平遺跡が所在することから、その集落の分村として小集落が段丘上に営まれた可能性がある。

これまでの調査により、掛之上・大門遺跡において弥生時代中期から後期の遺構数が増えることから、この段丘上には鶴松・徳光遺跡や坂尻遺跡に次ぐ規模の集落が営まれたと見られる。その検出遺構から掛之上遺跡を墓域として大門遺跡が居住域となった時期が見られる。中期まで掛之上・大門遺跡の墓域と考えられている団子塚遺跡に中期の墓域と重複して後期の集落が出現し、中期の段階で墓域でなかった北原遺跡にも集落が営まれるようになるため、団子塚・北原遺跡の墓域は、居住域からやや離れた高尾向山Ⅱ遺跡の方形周溝墓群と考え、この時点で拠点集落であった掛之上・大門遺跡から団子塚・北原遺跡が分村したことによって現れたものと考えられる。

このような集落の拡大、分村という動きは、太田川水系では下流域の低地における十二所遺跡群や鶴松遺跡群の成立と発展、掛川市の和岡丘陵遺跡群に見られる後期に集落が丘陵部へ進出する動きと同一の現象と考えることができる。

袋井市周辺では河川規模が小さいことから、形成される沖積平野が狭く、平野部の自然堤防等の微高地の発達が顕著ではなく、掛之上・大門遺跡や愛野向山遺跡のような段丘上や低位の丘陵に立地する集落とともに、一色前田遺跡や掛川市八景山遺跡、森町片瀬城遺跡のように環濠をもつ高地性集落・三沢古墳群や愛野向山遺跡のように環濠を持たない高地性集落が現われる。しかし、西遠江の後期集落のほとんどが環濠集落であるのに対し、袋井市周辺では、平野部の鶴松・徳光遺跡では環濠らしい溝が見られるが、大多数の集落遺跡では環濠は造られることなく対照的である。

弥生時代後期に比べ、古墳時代前期には遺構・遺物が減少することから、掛之上・大門遺跡の集落は一時的に衰退したと見られる。その後、再び遺構・遺物の検出・出土量が増すのは古墳時代後期になってからで、掛之上遺跡側では6世紀代の遺構が調査区全域から確認されている。特に大門大塚古墳と同時期と見られる柵列に囲まれた豪族居館状の居住区も確認された。6世紀後半になると、総数100基を数える長者平古墳群や地藏ヶ谷横穴群、金山横穴群等が近隣地に現れることから、掛之上・大門遺跡がその造営者集団の拠点集落であったと考えることができる。

(2) 調査の経過と成果

調査に至る経緯

袋井市高尾地内で掛之上からJR東海道線を陸橋により渡り南下する田端掛之上線整備に伴い、移転対象となった個人宅の移転先となる袋井市高尾字大門815番の8番地について、袋井市都市建設部建設課用地対策室より埋蔵文化財の有無の相談を受けた。

移転希望地が大門遺跡の範囲内に含まれる旨を伝えたところ、用地対策室を通して住宅移転対象者より、建築物の基礎設計のため埋蔵文化財の詳細な資料が必要なため、平成19年9月5日付けで確認調査の依頼書が提出され、地下遺構の残存状況及び表土から遺跡までの埋没距離確認のための試掘確認調査を平成19年度の市内遺跡発掘調査等事業の一環として実施した。調査面積は24㎡である。

現地調査は袋井市教育委員会生涯学習課文化財係水野雅彦を担当者として平成19年11月19日～11月22日にわたって実施した。遺構実測図及び写真撮影は水野が行った。

調査方法と調査区設定

調査対象地北側に東西方向で12.5m、幅1.2mの1trを設定し、この1trに接続して南北方向に8m、幅1.2mの2trを設定し、重機によって表土を除去した後、人力で遺構確認を行った。また、

調査対象地南西隅においても確認のための1.2m×1.3mの3 t rを設定し遺構面の確認を行ない、全てのトレンチからは遺物包含層及び遺構を確認した。

遺構図・土層断面図は20分の1縮尺で作成、記録写真は35mmサイズ原画(カラー)を使用した。

調査成果

大門遺跡はその立地から宅地化が進み、台地上において多少凹凸があった場所が削平を受けていた。1 t r及び2 t rの土層観察により、調査地は本来、南東方向が高く北西方向に向かって傾斜する土地であった可能性が高い。その旧地形を切り盛りして平坦面が造られていた。1 t rでは遺物包含層が確認できたが、2 t rでは確認できないため、ある時点で遺構確認面直上まで削平があったと見られる。また、1 t r及び2 t rで確認できた遺構面は弥生時代のもので、2 t rの土坑と見られる遺構からは単純口縁となると見られる細頸壺及び折り返し口縁を持つ壺、台付甕が出土している。

まとめ

この調査によって、確認された各遺構の性格については調査面積が小さいこと、遺構を完掘していないため不明であるが、竪穴住居の周溝や掘立柱建物と見られ、大門大塚古墳以北においても遺構が良好に残存していることを確認することができたことは一つの成果と考えられる。

調査地がある台地における弥生遺跡の全体像の推定がある程度可能となりつつある。また、本調査地は大門大塚古墳に近接しているが、古墳時代以降の遺構・遺物は検出されていない。削平により失われたと見られるが、その時代の遺構の分布に偏りが見られるのか、今後の検討課題と考えられる。

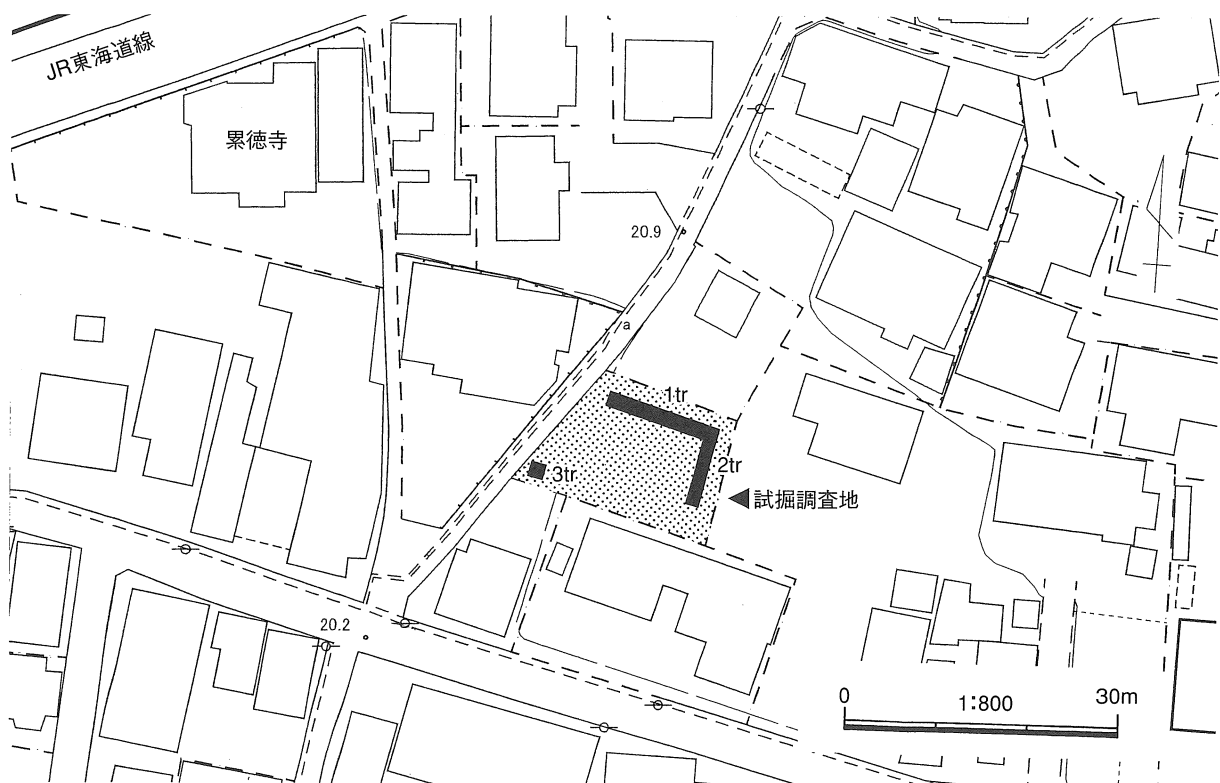


図30 大門遺跡試掘確認調査トレンチ配置図

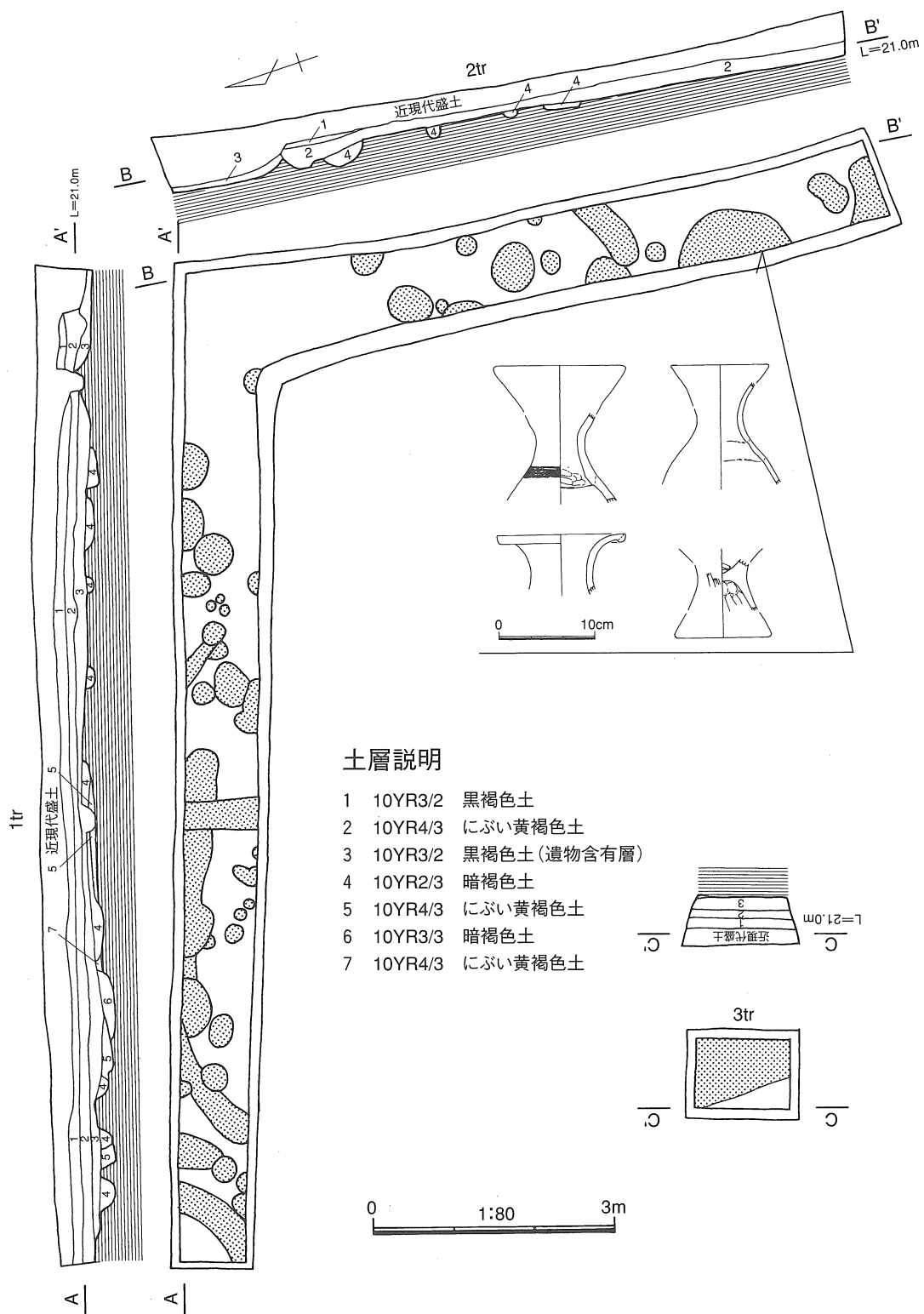


図31 大門遺跡試掘確認調査遺構分布図

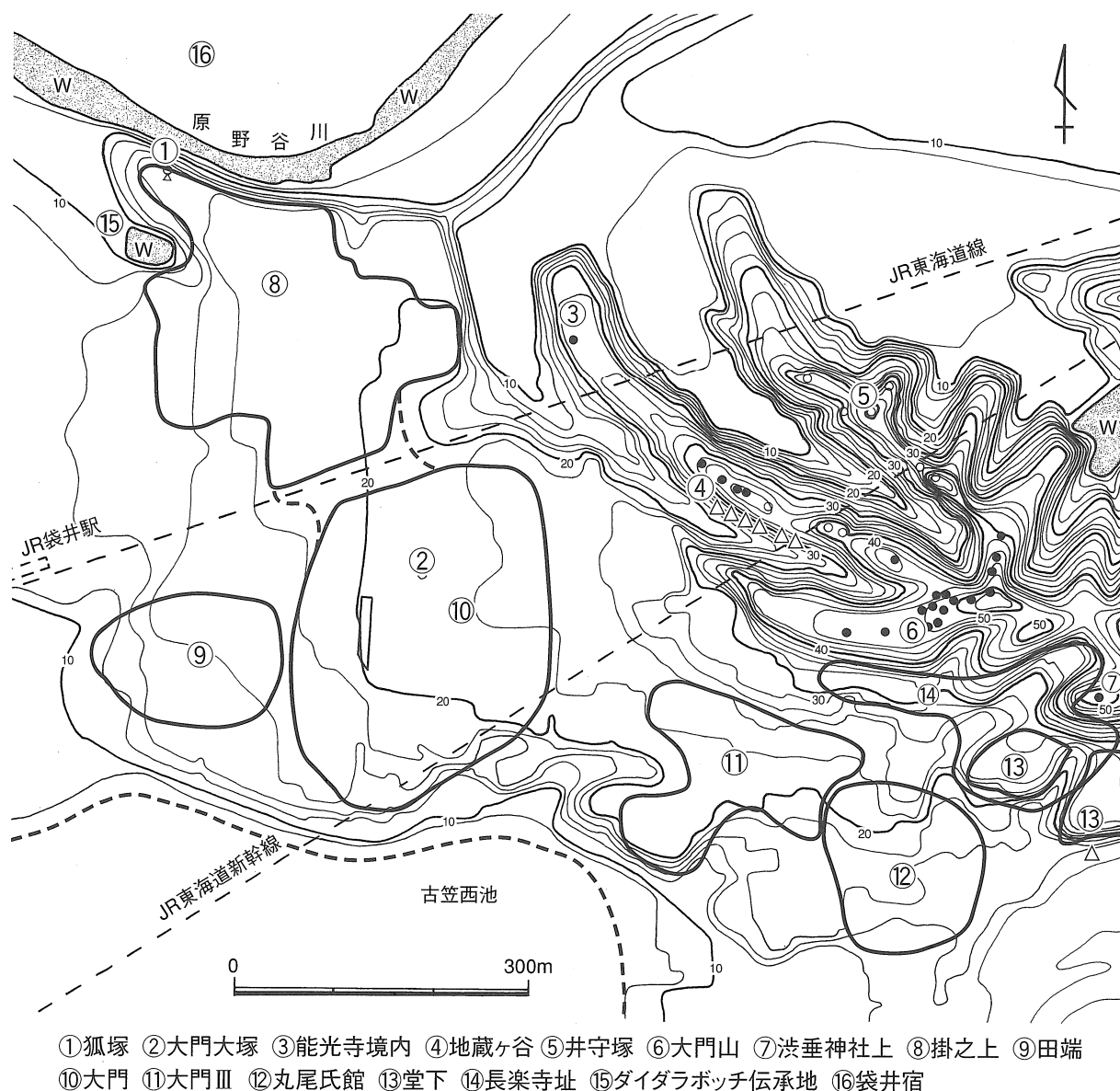


図32 大門遺跡周辺の旧地形復元・主要遺跡、古墳群・横穴群分布図

6 節 山畑遺跡・萱間地点

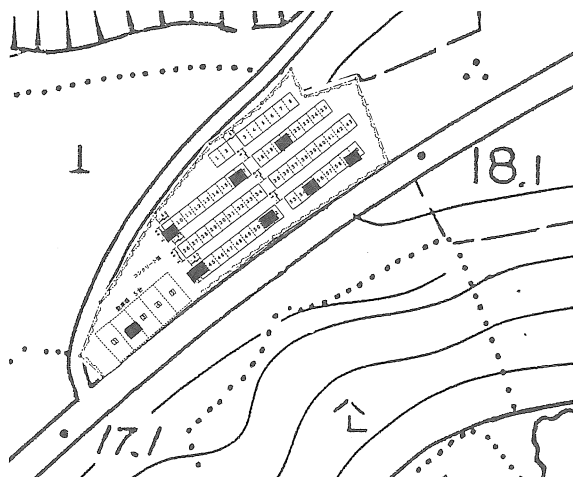
(1) 山畑遺跡試掘確認調査

調査に至る経緯

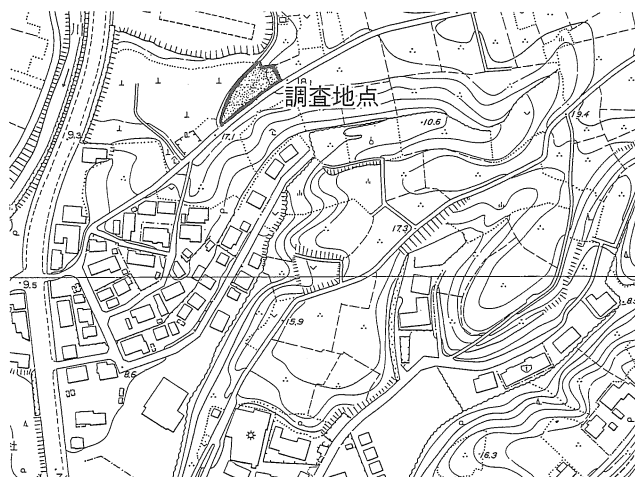
山畑遺跡は原野谷川に臨んだ小笠山山麓段丘上の先端近くに位置し、弥生土器片が採取されたことにより、散布地として周知の遺跡に登録された遺跡であるが、遺跡の範囲は墓地となり、内容のわからない遺跡であった。2004年に墓地に隣接する土地で新たな墓地造成の計画が持ち上がり、埋蔵文化財所在有無の照会が浅羽町社会教育課にあったことから、平成16年度浅羽町内遺跡発掘調査等事業として試掘確認調査を実施した。調査は2004年7月8日～9日にかけて実施し、調査面積は25㎡である。

調査経過及び結果

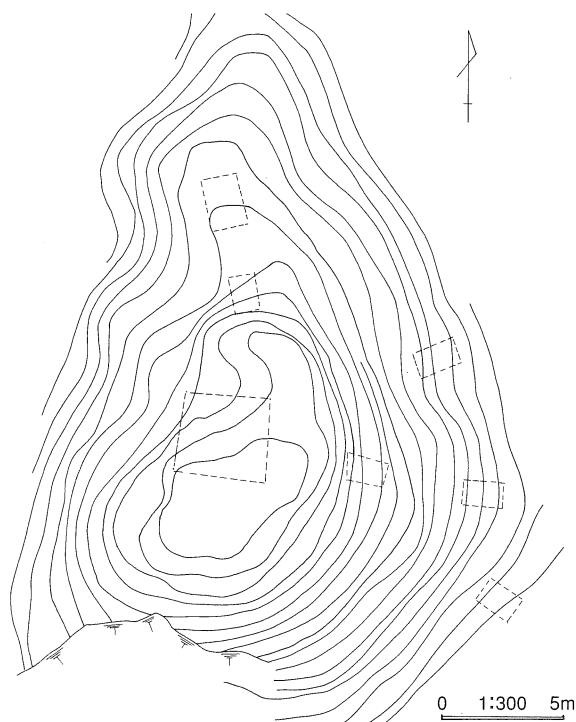
調査対象地内に1.5m×2m規模のトレンチを8箇所設定し、人力によって地山面まで掘削を行っ



山畑遺跡のトレンチ配置



山畑遺跡トレンチの位置 S=1/5,000



萱間地点トレンチ配置



萱間地点トレンチの位置 S=1/50,000

図33 山畑遺跡・萱間地点調査位置とトレンチ配置図

た。土層は地表から約40cm下で地山面となるが攪乱を受けている。各トレンチからは、1～2個の小穴(ピット)が確認されたものの深さは10cm前後と浅く、地山面も削平を受けており遺物は出土しなかった。

(2) 萱間地点試掘確認調査

調査に至る経緯

周智郡森町との行政境をなす萱間地区の丘陵部、標高83.5mの最高所を中心とする範囲において土地開発の可能性が模索され、袋井市文化財係に埋蔵文化財所在有無の問い合わせがあった。現地踏査を実施したところ、古墳の可能性を持つ地形と判断されたので、2005年9月27日～29日にかけて試掘

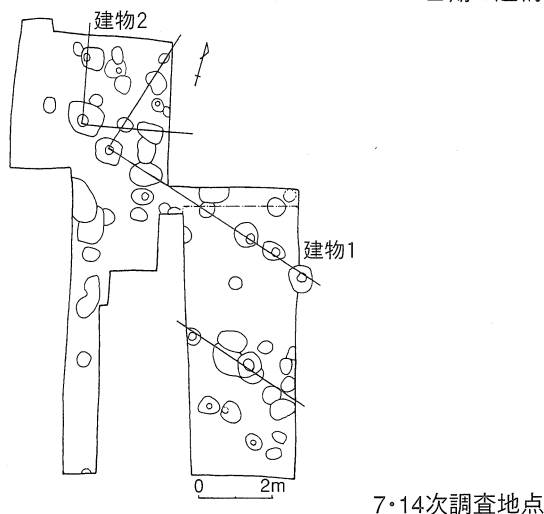
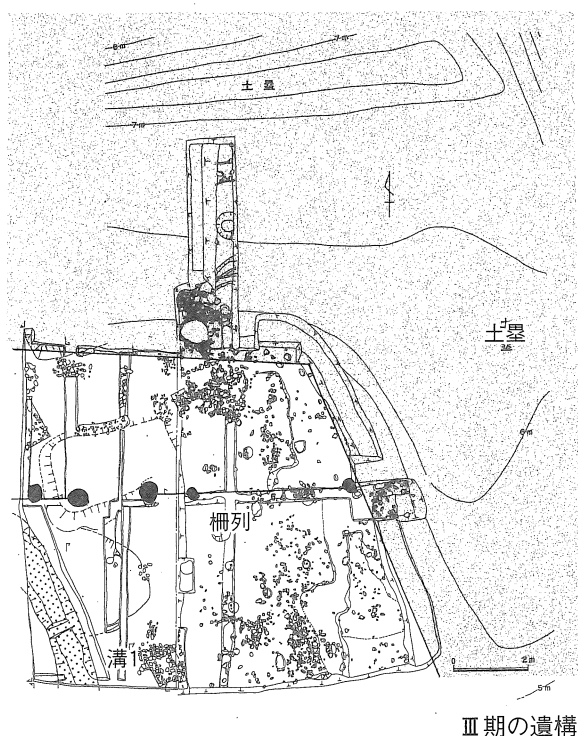
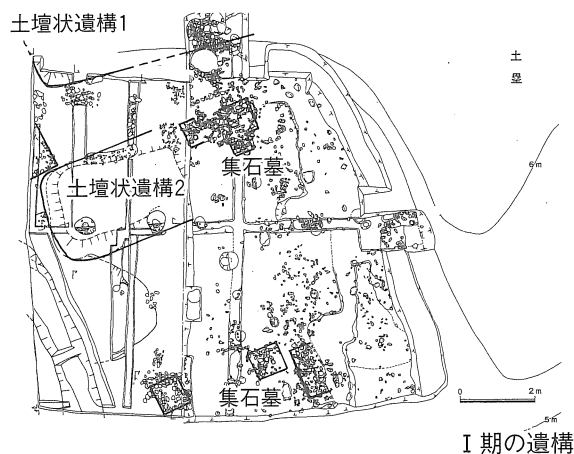


図34 馬伏塚城跡主要遺構図

確認調査を実施した。

調査経過及び結果

現地は古墳の可能性を考慮したので、最初に平板を用いて100分の1の縮尺で、25cm間隔の等高線を入れた地形図を作製し、これに並行して旧地形が残っていそうな8箇所にはトレンチを設定した。測量の範囲は約400㎡である。

調査の結果、古墳や遺跡の存在を示す痕跡は発見されなかった。

第3章 総括

本書で報告した遺跡のうち、纏まった成果を収めた馬伏塚城跡と古新田遺跡について、簡単なまとめと今後の見通しを整理しておきたい。

馬伏塚城跡 14次にわたる調査を実施した馬伏塚城は、『諸国古城之図』に記された「本丸」に相当する南郭群から9次調査1)によって城郭の前身遺構群が確認され、Ⅰ期 中世墓地→Ⅱ期 寺院(小笠原家菩提寺天岳寺)→Ⅲ期 徳川期馬伏塚城(天正2年(1574))と変遷したことを推測したが、前身遺構については不明瞭な点が多かった。

9・11次調査の成果を併せて全体を検討すると、Ⅱ期の遺構とされる寺院建物を構成する礎石建物に伴う柱痕跡は11次調査では確認されず、再検討が必要となった。

Ⅰ期の集石墓群、土壇状遺構は、主軸を西に約20度振れて規格性を持ち、時間的に近接するものと考えられる。この地点から、かつて出土した石塔の年代は15世紀末～16世紀末にかけてのもので、土坑墓に伴う常滑大甕は16世紀前半、11次調査で出土した馬伏塚城以前の遺物の殆んどが15世紀末～16世紀前半と矛盾しない。

Ⅲ期は整地土を行った上に土塁を設け、柵、溝で区画されるレイアウトが復元できた。

居館推定域で行った7・14次調査によって方向を異にする複数の掘立柱建物跡を確認したが、特に建物1は徳川期馬伏塚城以前、建物2

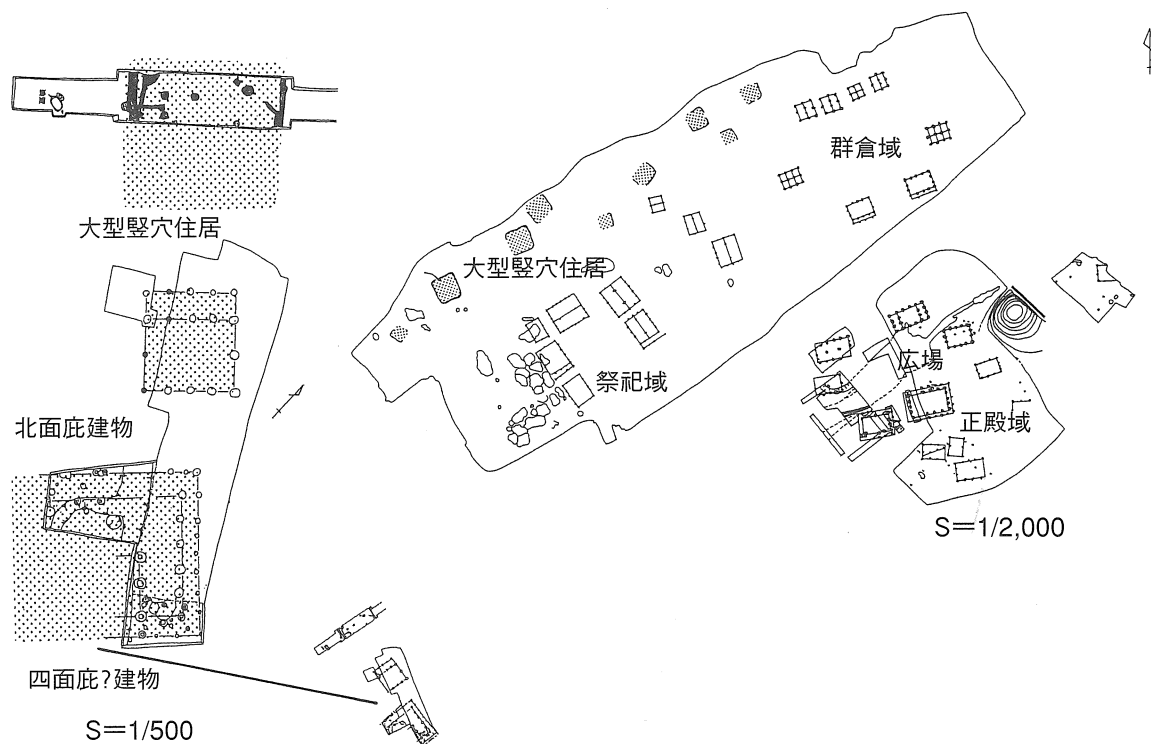


図35 古新田遺跡主要遺構図

は16世紀末以降と、大改修が加えられた徳川期のものは確認することができなかった。

古新田遺跡 2003年度まで9次にわたって行った調査により、5世紀後半～6世紀初頭に及ぶ豪族居館、あるいは居宅とも評価される古新田遺跡中枢部の構造が明らかとなった。

約20,000㎡に及ぶ区画には、浅い谷頭を埋め立てた広場の廻りに、四面庇建物を中心に大型掘立柱建物が数棟並んで正殿域を、北側には広場を挟んで南面には庇付建物と、北面には倉庫群が並ぶ群倉域が、これの西側には複数の土坑が設けられた祭祀域が、北端には大型竪穴住居がそれぞれ整然と配置されており、居館に至る尾根筋ではこれまでの調査によって、同時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑が広範囲に存在し、居館の奥には全長32mの前方後円墳(貫名地B2号墳／6世紀前半)を盟主墳とする貫名地古墳群B群が存在することがわかっていった²⁾。

11～13次の調査によって、居館域の西端から60mほど隔てた手前側の約50mしかない狭い尾根稜線上に、方角を同じくする建物群が存在し、しかもその内容は南から四面庇建物の可能性を持つ掘立柱建物、北面庇の掘立柱建物、一辺10mに及ぶ大型竪穴住居と通常の建物とは明らかに異なるものであり、周辺の調査によって、今後更に方向を同じくする建物は増加すると考えている。

これら建物の年代は、大型竪穴住居内から出土した土師器坏・小形埴、須恵器甕片から古新田居館の古い段階である、5世紀後半と推定しており、遠江において同時代の集落遺跡と比較して突出した様相が指摘できる古新田遺跡の特異性を増すものと考えているが、多くは今後の周辺調査の進展に待ちたいと思う。

1) 「馬伏塚城跡第1～9次試掘確認調査」『袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』静岡県袋井市教育委員会 2008年

2) 「古新田遺跡2～4次調査、貫名地B2号墳範囲確認調査」『浅羽町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』浅羽町教育委員会 2002年



1. 高道遺跡 3 次 1 トレンチ全景



7. 高道遺跡 4 次 1 トレンチ



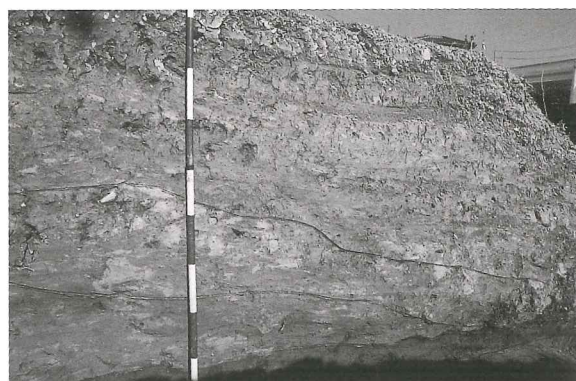
2. 高道遺跡 3 次 出土遺物



8. 高道遺跡 4 次 3 トレンチ溝



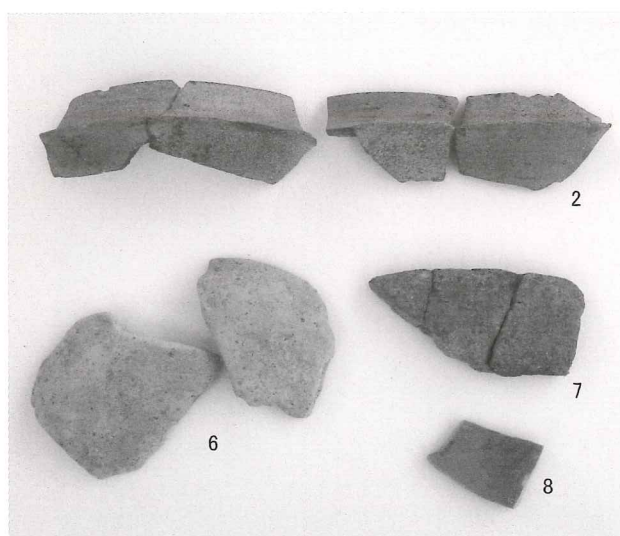
3. 高道遺跡 3 次 出土遺物



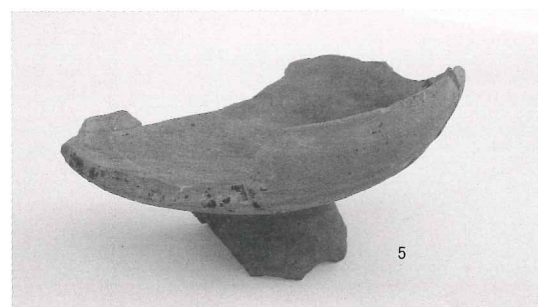
9. 高道遺跡 5 次 3 トレンチ



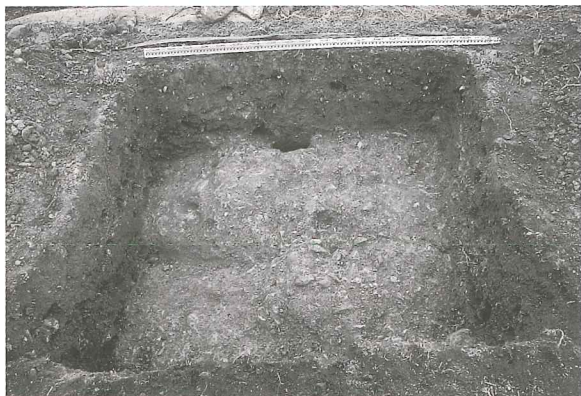
4. 高道遺跡 3 次 出土遺物



6. 高道遺跡 3 次 出土遺物



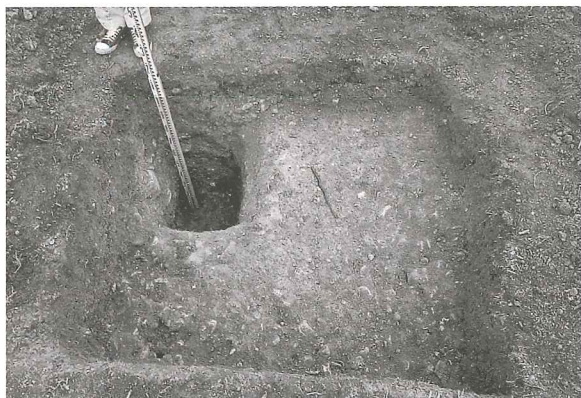
5. 高道遺跡 3 次 出土遺物



1. 高道遺跡6次調査6-1 tr (西から)



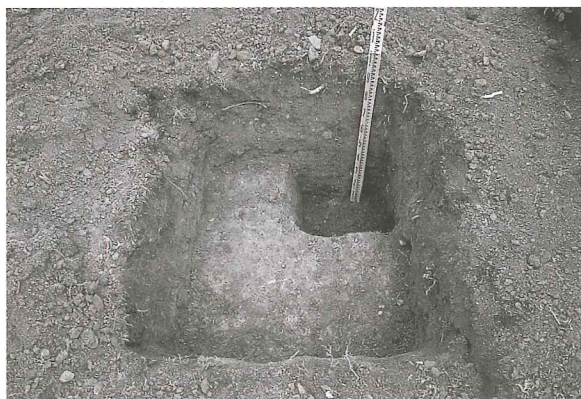
2. 高道遺跡6次調査6-2 tr (西から)



3. 高道遺跡6次調査6-3 tr (西から)



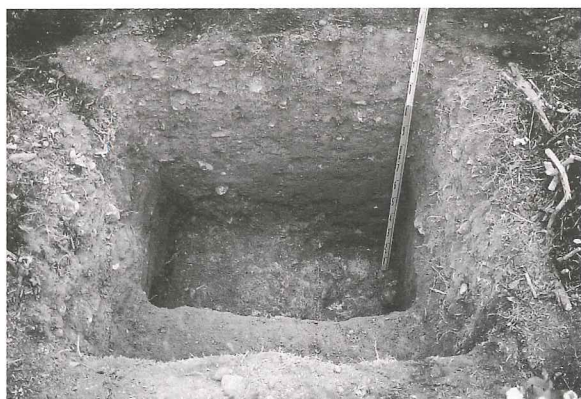
4. 高道遺跡6次調査6-4 tr (西から)



5. 高道遺跡6次調査6-5 tr (西から)



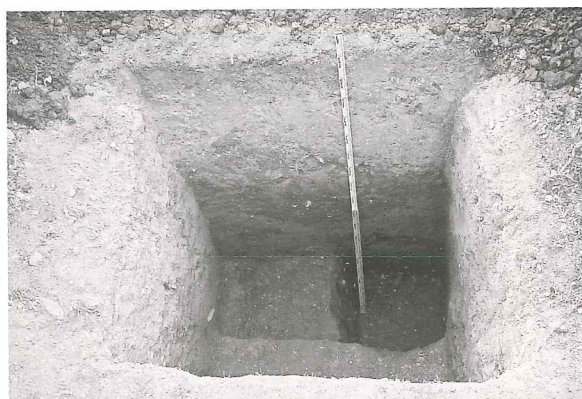
6. 高道遺跡6次調査風景 (東から)



7. 高道遺跡7次調査7-1 tr (東から)



8. 高道遺跡7次調査7-2 tr (東から)



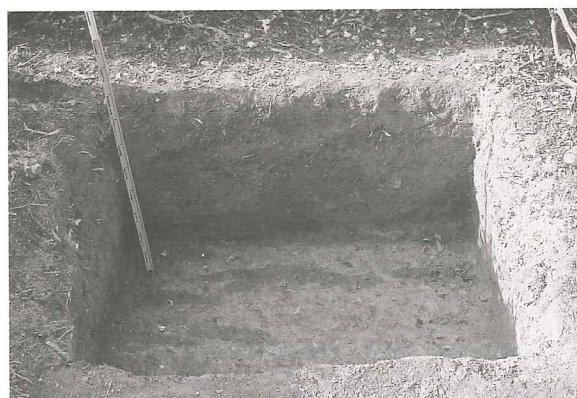
1. 高道遺跡7次調査7-3 t r (東から)



2. 高道遺跡7次調査7-4 t r (東から)



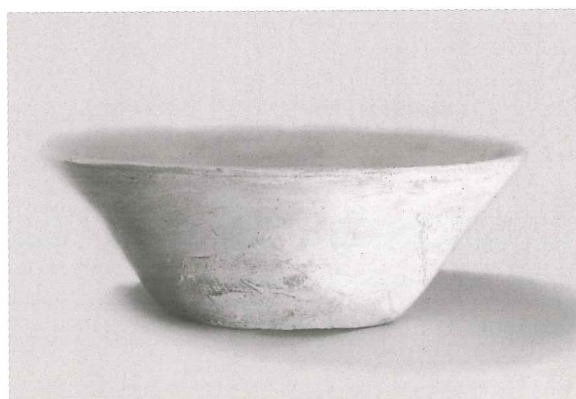
3. 高道遺跡7次調査7-5 t r (東から)



4. 高道遺跡7次調査7-6 t r (東から)



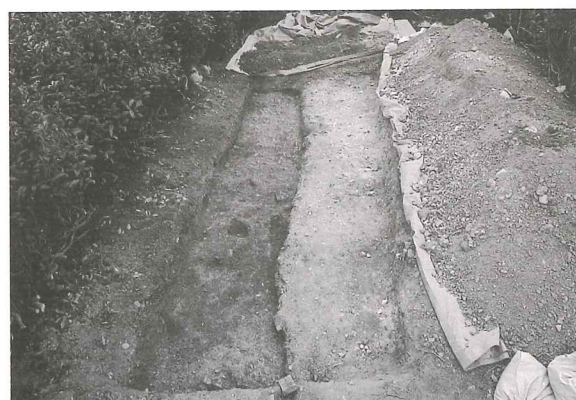
5. 高道遺跡7次調査7-7 t r (東から)



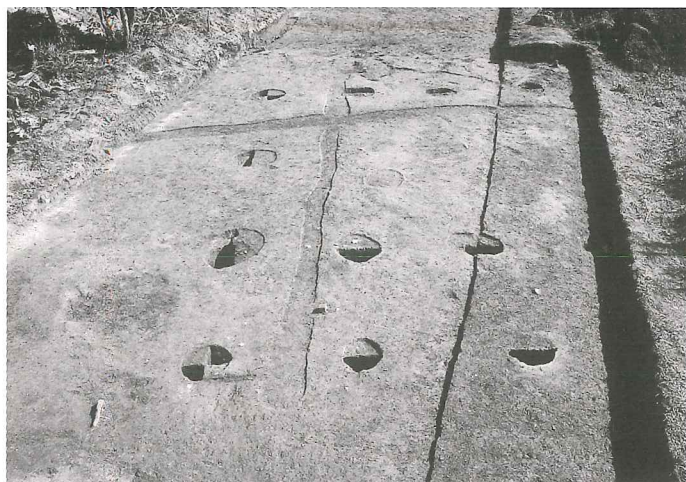
6. 高道遺跡7次調査 出土遺物



7. 古新田遺跡10次調査 西トレンチ



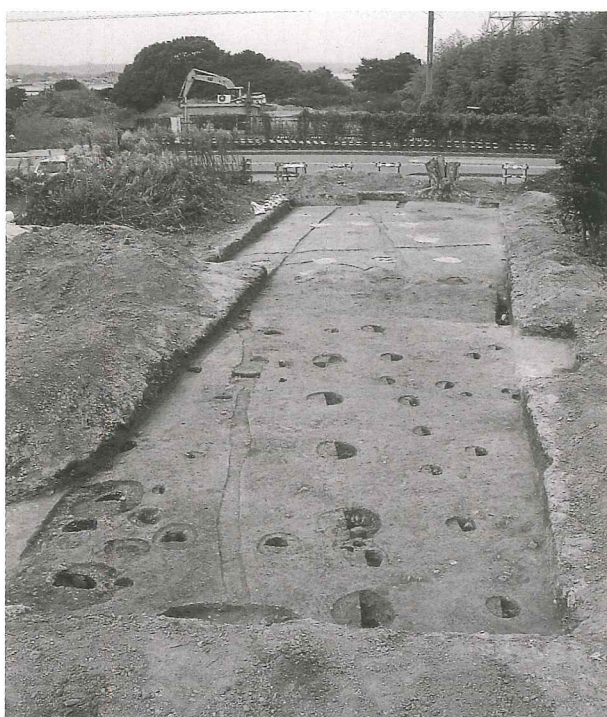
8. 古新田遺跡10次調査 東トレンチ



1. 古新田遺跡11次調査 掘立柱建物1（北から）



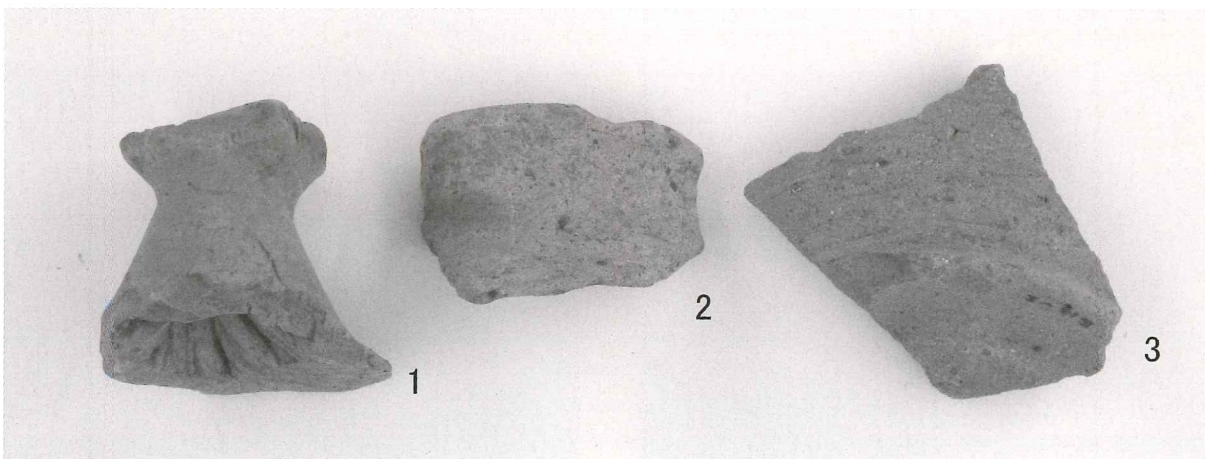
2. 古新田遺跡12次調査
掘立柱建物1（西から）



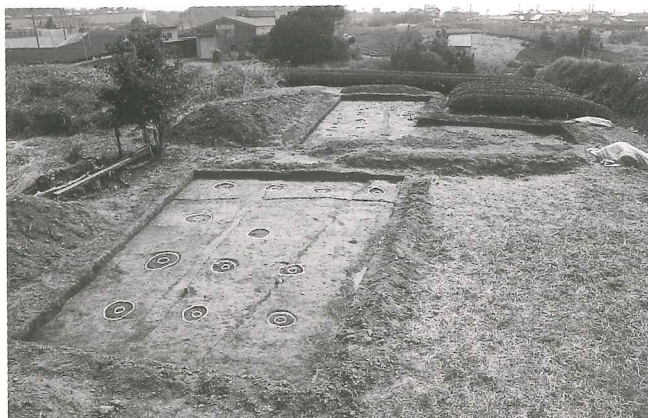
3. 古新田遺跡11次調査 掘立柱建物2（南から）



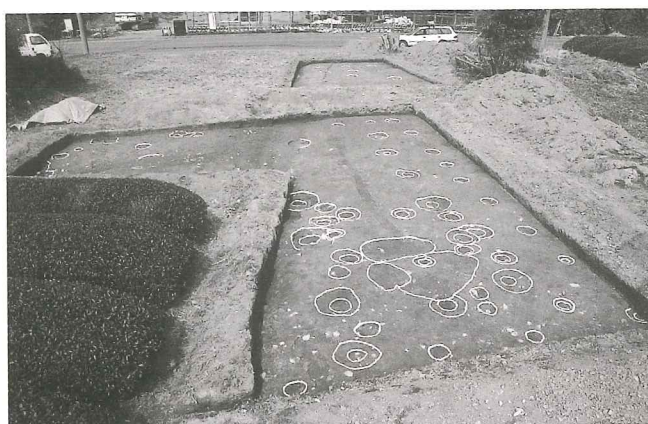
4. 古新田遺跡11次調査 掘立柱建物2 柱部分



5. 古新田遺跡13次調査 出土遺物



1. 古新田遺跡13次調査全景（北から）



2. 古新田遺跡13次調査全景（南から）



3. 古新田遺跡14次調査風景



4. 古新田遺跡13次調査地周辺



1. 古新田遺跡13次調査全景



2. 馬伏塚城跡11次調査 調査区全景（北から）



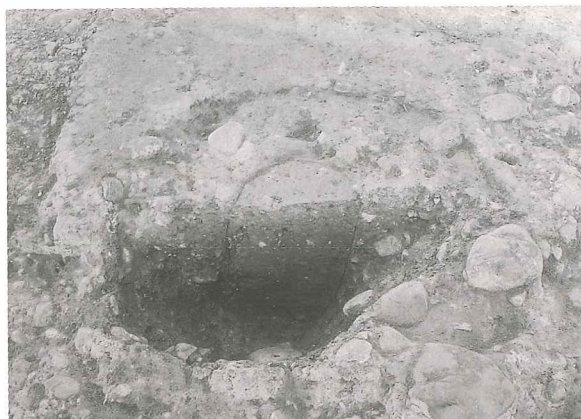
3. 馬伏塚城跡11次調査 溝1（西から）



4. 馬伏塚城跡11次調査 土壇状遺構2（西から）



5. 馬伏塚城跡11次調査 集石3（北から）



1. 馬伏塚城跡11次調査 柱穴2 半截状況



2. 馬伏塚城跡11次調査 土坑内サブトレンチ



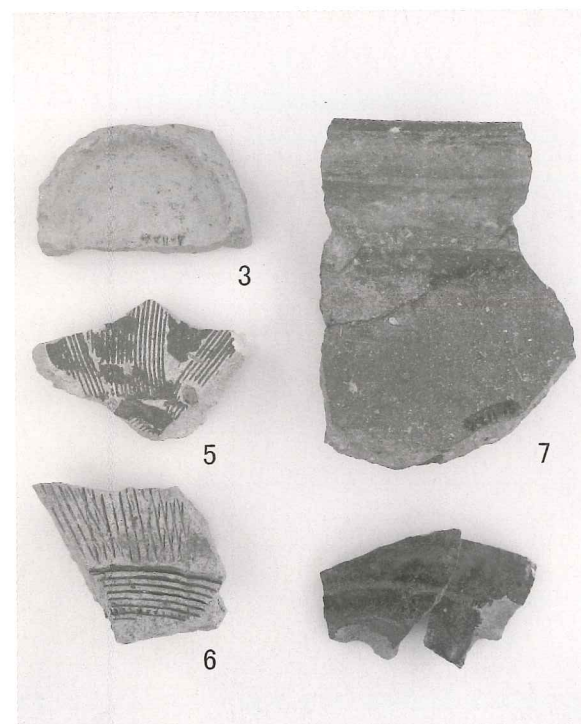
3. 馬伏塚城跡11次調査 出土遺物 1



4. 馬伏塚城跡11次調査 出土遺物 2



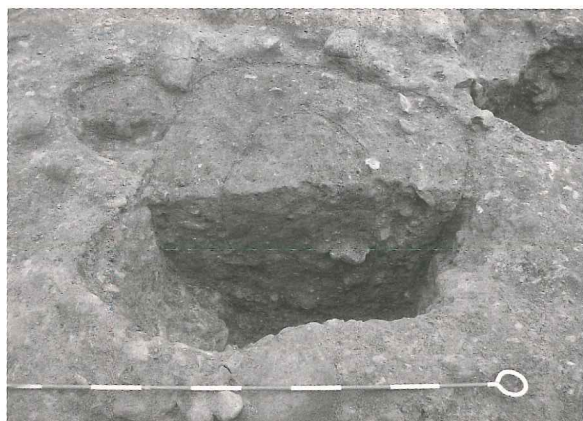
5. 馬伏塚城跡11次調査 出土遺物 4



6. 馬伏塚城跡11次調査 出土遺物



7. 馬伏塚城跡14次調査
中央トレンチ (南から)



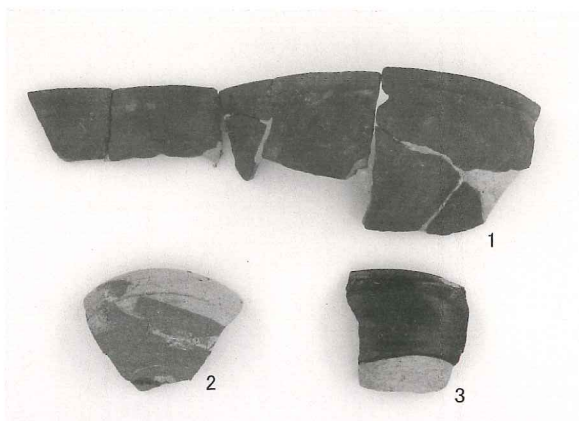
1. 馬伏塚城跡14次調査 中央区柱穴2



2. 馬伏塚城跡14次調査 中央区土坑1



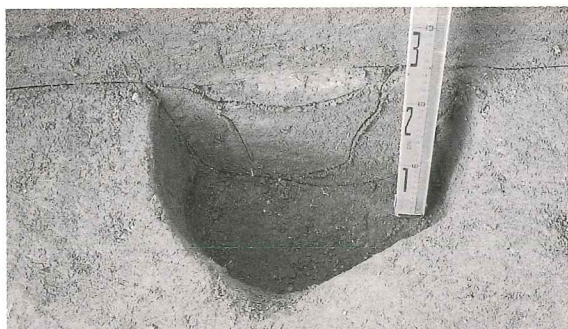
3. 馬伏塚城跡14次調査 東区全景（東から）



4. 馬伏塚城跡14次調査 出土遺物



5. 松山遺跡2次調査 1トレンチ（南から）



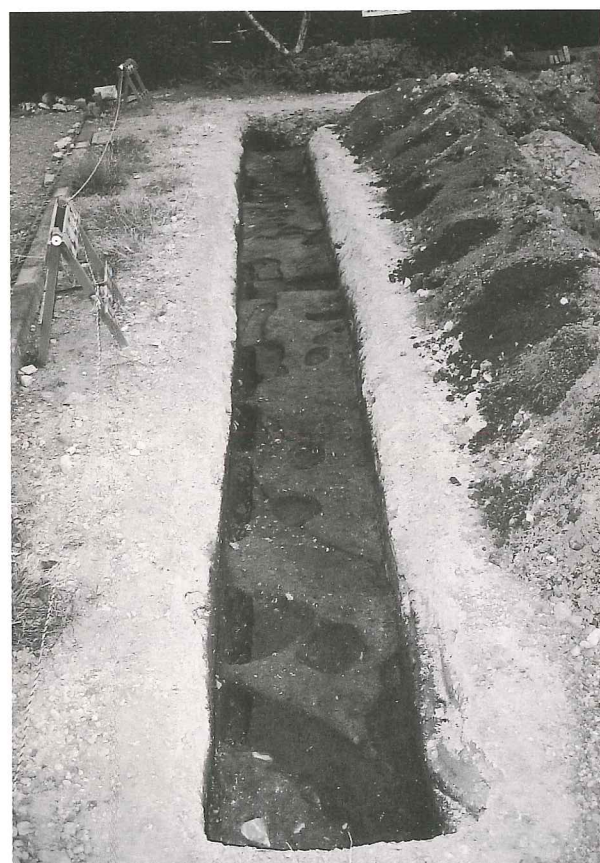
1. 松山遺跡 2 次調査 2 トレンチ柱穴



2. 松山遺跡 2 次調査 1 トレンチ出土遺物



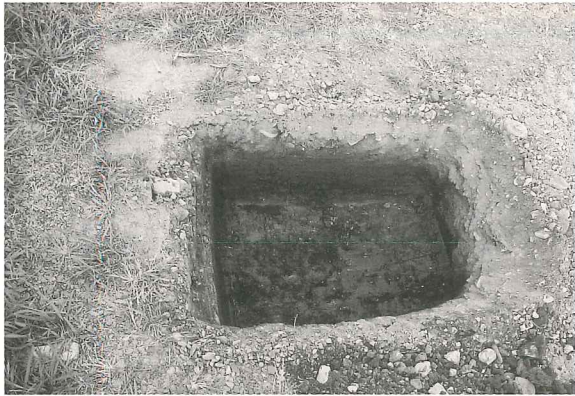
3. 松山遺跡 2 次調査 2 トレンチ (北から)



4. 大門遺跡試掘調査 1 t r (西から)



5. 大門遺跡試掘調査 2 t r (北から)



1. 大門遺跡試掘調査3 t r (東から)



2. 大門遺跡試掘調査2 t r 遺物出土状況



3. 大門遺跡試掘調査地近景 (北から)



4. 大門遺跡試掘調査地近景 (北から)



5. 大門遺跡試掘調査出土遺物



6. 大門遺跡試掘調査風景



7. 浅羽大囲堤 道路部分截ち割り状況



8. 浅羽大囲堤残存部 (南から)

報告書抄録

ふりがな	ふくろいしないいせきはつつちょうさほうこくしょ よん									
書 名	袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ									
編 著 者	山本義孝（編集） 水野雅彦									
編 集 機 関	袋井市教育委員会 袋井市浅名 1 0 2 8 TEL 0538(23)9269									
発 行 機 関	袋井市教育委員会 袋井市浅名 1 0 2 8 TEL 0538(23)9269									
発行年月日	2009年 3 月31日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡番号							
たか みち い せき 高道遺跡	しずおかけん 静岡県 ふくろいし 袋井市	22216	20	38度42分58秒	137度55分24秒	20040709～0810 20050808～09 20060222～23 20061017～19 20071127～1205	302㎡ 40㎡ 30㎡ 18㎡ 16㎡	店舗造成 宅地造成 宅地造成 個人住宅造成 集合住宅造成		
こ しんでん い せき 古新田遺跡			19	34度43分10秒	137度55分38秒	20060210～15 20060911～1013 20070322～23 20080306～14 20080701	16㎡ 140㎡ 9㎡ 126㎡ 13㎡	範囲確認 範囲確認 範囲確認 範囲確認 事務所造成		
まむしづかじょうあと 馬伏塚城跡			24	34度42分48秒	137度55分58秒	20080107～0314 20081211～090219	34㎡ 40㎡	範囲確認 範囲確認		
まつ やま い せき 松山遺跡			37	34度41分18秒	137度56分32秒	20080107～16 20080117～24	22㎡	範囲確認		
あさばおおがこいづつみ 浅羽大囲堤			51	34度41分16秒	137度56分41秒	20090210	150㎡	範囲確認		
だい もん い せき 大門遺跡			158	34度44分29秒	137度55分49秒	20071119～22	24㎡	個人住宅造成		
やま はた い せき 山畑遺跡			9	34度43分38秒	137度55分13秒	20040708～09	25㎡	墓地造成		
所収遺跡名			種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特 記 事 項	
たか みち い せき 高道遺跡			集 落	古墳・中世		溝状遺構		衛門坂窯産 須恵器		
こ しんでん い せき 古新田遺跡			居 館	古墳		底付掘立柱建物		土師器		
まむしづかじょうあと 馬伏塚城跡	城館跡	室町～戦国		土壇状遺構、集石墓、溝、柵		かわらけ、天目碗				
まつ やま い せき 松山遺跡	散布地	古墳・中世		掘立柱建物		古式土師器				
あさばおおがこいづつみ 浅羽大囲堤	堤 防	江戸		堤防						
だい もん い せき 大門遺跡	集 落	古墳		小穴		弥生土器				
やま はた い せき 山畑遺跡	散布地	弥生・古墳		小穴						

静岡県 袋井市

袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ

2009年3月31日発行

編集・発行 袋井市教育委員会

印刷 静岡県磐田市岩井2295

株式会社 大進堂

TEL(0538)32-9165
